



1 普 5  
804  
2



イ  
マ

書  
804  
2

印



○戊戌三月九日ノ曉後侍ヨリ告テ曰。辨慶橋出火スト。朝ニ至テ能ク聞ケバ  
 西城失火ト。予始テ驚キ。即人ヲ使メ問ハ令ルニ。西城ノ御臺所出火ト。  
 或ハ後宮ノ女局出火ト聞ヘテ。後又曰。其火御玄関ニ及フト。予心安カラズ。  
 屢々數人ニ問ニ。御城内ヲ知ル者咸曰ク。西城悉ク炎上セリト。予寢食ヲ  
 易シセズ。雖然又爲<sup>ナス</sup>ベキ莫ク。彼是ニ思回ラセテ。羽無キ鳥ノ如ク爲ン方  
 ナク。責テハト。寺島ナル隱居ヲ訪タルガ。所勞アリ。迎卧床ニ逢タレバ。幸ト  
 處ハ憚レテ。迎。大御所ノ御安否ヲ窺奉リシガ。御機嫌宜シク。聊尊恙  
 ナシト聞テ。始テ心ヲ安ンジタリ。夫ヨリ諸人ニ聞マシニ。茲ニシルス。  
 コノ度ノ天災申モ恐有リ。且相國公ノ御仁慮。御勇量云モ憚有レド。誰  
 ヲリ聞ヒナク。又夢ノ若ク覺ヘ来テ。斯クモ述奉レリ。

三石上卷  
 卷之三  
 三石上卷

其朝ノイトヨ思ハバ夜ベヨリ御殿ノ床下ニ火及ビタルト覺シク頻ニ煙ニ  
テ見ヘシカバ御小姓某出火ナリト言上セシニ何レナリヤト上意ナルヲ御臺  
所石ノ間ト言上セシカバ上御驚キ御答モナク有シヲ御傍ノ衆中某  
ハ乱心ニ非ズヤト言ハバハヤ御休息ノ間ハ火煙覆フヲ上覽有テ即御  
而ワラ帶サセ給ヒ直ニ大奥ヘ入御大御臺所ヲ始メ奥中部屋々々御  
廣鋪迄モ残ナク起退方御自ラノ御指揮ニテ夫ヨリ速ニ表ヘ出御ニテ  
表奥ウチ交リ不吾ト御自ラ仰渡サレバ御小姓御小納戸御側ラナル  
御武器バカリヲ持ツハ大奥ヘ乱レ入ル大御臺所ハ御小納戸頭取某御介  
抱申奉リ御輿ニ載セ奉リ即自身前捧ヲ昇キ後捧ハ奥防主某昇  
奉リ奥向ノ男女一同奥御庭口ト云ヨリ山里通ト云ヲ吹上新御茶屋

ト云ニ御立退有給ヒシトゾ相國公ニハ白羅紗ノ御火事羽織ニテ男女  
上下又者ニ到ルニテ一々御指揮ニ依テ火急ノ場ヲ脱退其程殊更ニ御  
行届キ大勢幾千人者モ一人ノ怪我モナク不難ニ立退タルヲ誠ニ希代  
御執計リト皆人難有キハ勿論感泣シ仰ギ奉レリト聞ク因云フ君上  
ヨリ見テハ十萬餘石ノ諸侯ハ予ガ輩ト比シテハ大身ニメ人モ少ナカラザ  
ルニ如斯キ違変ニハ怪我過モ多カルニ此度ノ火変ハ未聞ノ一ナルニ  
大公カハル御振回ハ實ニ武家ノ大相國征夷ノ前將軍ナル哉予隱倫モ  
亦傳聞テ竊ニ感涙止メ難カリシカハルヲナルニ下説ニハ銅御門トカ云ヲ聞メ  
開カハレバ大奥ノ女員火ニ逐ハレテ怪我モ有リシ  
トゾ是等全ク君上ノ御德惠ヲ  
知ラザル賤輩小人ノ訛語ナリ  
又荻長ガ話レルハ某其巾ハ直夜ニテ御番所ニ富士見御  
宝藏番在リシエカノ

災ノ始終ヲ知レリ。火燃揚リテ始テ知タレバ。迺御土手ニ登リ望見タルニ。火炎直ニ升リ。實ニ天ヲモ燒ク有サナルニ。防火ノ者連ハ一人モ無ク。縦火ノ一ニ焚タルナリ。其間闌ニ及シテ。大奥ノ女員退出ルガ。三路ト成リテ。簇リ行サ。其衣服ノ色。紅紫相交リ。群百ノ數人。恐入タレド。竜田川ノ紅葉カ。春花ノ爛熳ニタグヘテ。甚美觀ナリシト。何ニモサモ有ヌベシ。

コレニ及セシ話ナルガ。相承タルナリ。文鳳ト呼ベル女史ハ。学才ノ婦ニテ。公城ノ後宮御内妃ノ局ニモ屢ク立入ル者ナルガ。其後來リ話スニ。ハコ度西城ノ災ニ就テ。下賤ノ虚説云計リナシ。其中耳ニ入シノ最實ナルハ。某公城ニ入ントスル。平川口ノ外御堀端ニ。匠人ノ手問ト覺シキ者。躊躇メ升タリ。其言ハ今朝御城内出火ト聞クニ。奥女中サツ。數人逃出シ。飽メテ美色ヲ

觀ント。来リテ晝メデ待井ル。二人モ出来ラス。聞ケバ外ニハ出スト。高ヲ止テ。今メテ井タルニ。大ニ心當違タリ。是ヲ思ヘバ。先頃吉原ノ燒タル中。ハ土手ニ待井タル。女郎ノ逃出ルヲ飽メテ見タリ。御城ハ大ニ違ヒタリト云シト。文鳳歎息メ語リ。又是實情ナリ。連咲語セリ。コレ又大城ノ御堅固ナルヲ知ルノ一事ト為ベシ。等閑ニ讀ムベカラズ。

總メ御城内ノ出火ニ。町火消ハ入ラザル御定カ。又方角火消等ハ。御城入ラ為カ。然ルニ此度ハ。何為タルヤ。町防ノ人數御城外ヘ寄り来リタルヲ。事急ナレバ。何レヨリカ御城入ヲ云聞ケタレド。入ラズ。増ク急ナレバ。閤老越州ヨリ令タレド。猶豫ノ体ナリ。コレヲ聞テ。大草安房守町奉行御城入ト発言シタレバ。迺噴水ノ如ク馳入シト。孟子ノ所載。齊景招虞人ノ語思ヒ合セタリ。流石ハ

町奉行ノ任。又町々ノ匹夫狂狷ノ状斯クモ有ヌベシ。是ト謂フモ。光神ノ御治世ニ浸潤セシノ俗カ。

又荻長カ望見セシ中。定火消ノ輩コレモ御城入メ大奥トカニ掛リシ体ナルガ。峻屋ニ登リタレド。銅瓦ニ足止ラズ。數人スベリ落タル体。恰モ木葉ノ風ニ散ルガ如カリシトサレド。銳志ノ折ナレバ一人ノ怪我ナカリシト聞トク。

永井飛州ノ妻來テ話リシハ。飛州今ハ方角八手ノ中ニテ。早クモ出馬シタルガ。御城入ト有テ。即火掛ノ所。斯ノ大火ニ工容易ナラザレド。其手ハ仕合セニテ。水ノ手御泉水ノ邊ナレバ。手筈ヨク。消働十分メ。遂ニ御賞聲ヲモ蒙リシト。其一ハ他組ノ士分ハ。望タルバカリナルヲ。此手ハ士以上モ消防ヲ自為シト。旨ナリ。近キ御譜代。働キ方誠ニ本意ノ一ニゾ。又飛州其時ハ火

事装束ノ上ヨリ。火氣身ニ徹メ。足跡火氣ニテ堪ガタカリケルガ。帰宅ノ能見レバ。火傷セシニテ有リシト。サスレバ地モ炎氣ニ焦レタルト覺ユ。又大火ノ状想フベシ。葵御紋ノ御長櫃。御庭中ニ有タルガ。人モ無ク。焼テ四隅ノ金具散脱リ。裏ニ白キ綿子ノ御小袖。半バ焼ケタル杯有リ。御池ノ畜魚ナド。水ノ手ニ工。數多ク地上ニ汲上げシト。混乱ノサニ。聞クモ恐入タリ。又石翁ヲ訪シ。井ハ卧床ニ在テカノ災ノ井ハ未タ出勤セガ。ル前立人傳ノ言ト聞コエタルガ。火燒ノ井ハ圓キ大サ五寸餘ナル黒キ物。空中ヨリ飛タルガ。物ニ觸ルト。忽火粉散メ。著テ火発セシト。人言フコレ積年ノ煤塊ヲナシタルガ。火氣ニ吹カレテ斯ク飄シ者カト。

右妄語ニモ非ルハ。駿河臺ノ孫方ハ附置シ家頼。彼所ニテ聞シ。同

役本多具孫へ語りシハ御成殿ノ御床下ハ積年掃除ナケレバ煤殊  
更ニ有テ畢竟コノ度ノ災モ小火コレヲ傳ヒテ大ト成タレバ翌日ニハ  
御本丸ノ御床下悉ク掃除アリテ御機嫌伺ノ惣出仕ト打込甚ダ  
混雜シタリト。

又永井が妻ノ話ニ出火ト聞クト飛州ハ忽出馬ニ工留守ニ奥室ノ  
火槽ニ登リ御成ヲ望見メ在シニ火炎立騰ル中ニ何ヤラ板困ノ体ナルモノ  
見テト又是ニ火及テ焼タル体往々有リシ板困ヲ急ニ爲タル者カ又官ノ  
御定法ナルカト。

其後大奥へ出入スル婦来テ云ニハ此度ハ甚ノ急ニテ大御堂所ノ御立退  
ニ御山駕ト云シガコノ御山駕ト云ハ御園中御遊行ノ并乗給フ小形ノ御儀式ノ大ナル御駕ニハ有ラヌモノト云折フシ御本

丸へ御借シ有テ無ケレバ御式ノ御駕ヲ御来ノ御ハシタ五人トカメ昇テ御庭  
ノ山路ヲ昇越タリ夫ヨリ御外ノ御園中ニハ御人モ出合テ昇行恭ラセシト  
カレバ御小納戸頭取ト奥防主ト昇出シト云ハコノ時ノ一ニヤ又大奥へ出ル  
婦ノ云シハ御中老ノ中トカ志アル婦ノ大御堂所ノ御駕ヲ自ラ昇シトテ寄  
添シガ重々中クカ及バズ是非ナク御駕出ルヲ待テ隨恭ラセ御駕ニ  
傍ヒ徒歩メ立退タリト頗ル烈婦カ。

又出火ト聞テ閤老水越州一番ニ單騎ニメ馳ツケ御本丸ヨリ直ニ西城ノ  
火處ニ到リ働モ多カリシト参政堀和州モ亦一騎ニメ入營シ越州ニ劣ラ  
サリシト此人ハモト柳班ノ列侯何ニモ羨望セシト也閤老脇中書ハ久シク  
所勞アリテ乗馬ナラズ事急ナク駕夫二人ニ昇カセ馳タルガ同役松泉州騎

メ速ク見テ已モ駕ヲ出テ下乗所ノ手前ヨリ徒行メ急ガレシト古稀老人壯ナル哉又或人ノ言ニハ中書魁登ナリシト孰カ是ナル四氏皆旧家今猶サモ有ルベシ斯ル中今ノ外班ノ面々ハ各旧家ト雖凡寸志モ頭スニ由ナキツ實ニ歎息セリ

又前婦が言ニハ焼後大奥へ御安否ヲ窺ニ上リタルニ大奥長局ノ部屋所ニ依テハ一部屋ニ五十人ホド群居セラルト是御三所様ノ御人ト云予云フ大城ノ部局ナレバ其廣キ推察スベケレド人五十ヲ以テスレバ高下ニ由ルベカラズ然レハ御困厄ノホド想ヤリ恐入奉レリ

予西城ノ災ヲ聞ヨリ殊更ニ憂奉リ弥ク悉ク炎焼カト聞ケハ残無クト聞テ竊ニ御安否ヲ或方ニ窺タルニ吹上へ御立退ノウヘ焼燼ニ至リタル

ハ大御所公大御臺所ニモ御本丸へ入ラセラレタリ又火元ノハ即日ヨリ御糺有リケルガ斯ルコトニ及ベリト

三月十日 封廻状ノ趣

西丸 御所御所御所

一通り尋上

相澤久助

石邊人 龍巻ス

里村定五郎

同 表御所御所

山口正藏

一通り尋上

同 後役

中島伴三郎

石邊人

同 表御所御所

松坂長助



在於浮定河初麻野河因古大草五房古池田修理立合古房古  
中

三月十二日

西九 中腰河 中腰河人

相澤久助 四十二

平 里村定五郎 三十六

里村勇次郎 四十五

由井久年 六十三

市谷忠三郎 四十三

窪川滝三郎 廿八

乙津太三郎 四十五

田中九九郎 廿六

右 右 右 右 上揚 右 右 右

中腰河

一週尋上

出口洪三郎 四十

井上平藏 廿一

中

三月十三日

西九 中腰河 中腰河人

中腰河

水野誠前古

右於御前に作付

同敷

杯肥後守  
右代増山内守

右於奥に作付

伊豆守 松平内匠次  
 伊豆守 以平飛彈守  
 伊豆守 土岐丹波守  
 小巻守 野田中總守  
 伊豆守 三枝左衛門  
 西丸内匠 松平兵庫次

御前御書

鳥居八右衛門

右西丸御前御書御用掛に作付。於美蓉之間。老中列。松泉守中御。若年寄中侍。此。

御數寄屋坊主ノ中某下谷七軒町ニ住スル者十六日ニ來リ云フ某其日ハ非番ナリシガ曉後出火ト聞クト早速御城へ馳行タルガ西丸ト見テ彼御方ニハ銘々預リノ御物モ有レバ彼御殿へト往シガハヤ火充満メナカク寄就キ得ズ當番ノ輩ハ流石ニ當番ナレバ御預リノ御物ハ過半執片就テ夫ニ善キ御品ハ多分焚亡セス因テ此輩并ニ御數寄屋ノ向ハ此節御喜色宜クト話レリ。

三月十六日坊主組頭ヨリ左ノ達書ヲ渡ス。

伯耆守教公苗喜以爲差出居不願書伺書。臣書。今有改指上  
小標。所同人。及傳。中。爲。土。食。紀。伊。守。實。与。中。中。外。修。中。之。以。  
其。以。能。設。以。此。能。進。一。已。能。以。以。

コレ以テ思ハ。西城ノ史局。文書燒亡セシ者ナラニ。サレド。是等ハ當時  
目前ノ一二。憂ルニ足ラス。伯州ハ西城ノ閣老。土屋ハ大目附。類役ハ諸  
家ノ留守居ヲ云。

同月日。殿中沙汰書。

紀伊敎家老

水野土佐守

尾張敎家老

成瀬隼人正

西丸沙吾信二物。所居所向在大矣向也。

沙吾信二物。所居所向在大矣向也。

右左是蓉之間。掃部以老中列丸。和泉守中傳。

松平加賀守

松平敦中守

酒井左衛門尉

名代酒井格守

小笠原大膳大夫

名代千村彈正少弼

同封沙吾信二物。

右左沙黑書院。堀列丸。同前。同人中傳。

松平肥前守酒井雅樂左衛門松平清成と為堂和泉守  
松平下総守八五郎丹奉書ヲ以達ス

井伊掃部左

因松平氏傳ス

松平相傳

松平讃岐守

西丸炎上府上納金仕立有因縁ト通達 所徳也

所檢也 丹奉書 因松平通金ニ萬兩上納金ニ作付

右松平思書流涕掃部左衛門松平清成和泉守

是ニテガ御沙汰書ノ支ナリ。然ルニ内帷ノ人ニ聞ケバコノ讃州ノ願ハ

炎上ノ即刺トカ翌朝トカ登城メ。不慮ノ御下御當惑ノ程察シ奉ル

間上納仕度トテ直ニ持参トカ致サレタリト。因テ先ヅ其マニ成シ

置カレ。斯ク表立テ命令アリシト。實、事ト云。

又是ニ就云ベキハ。予思フ。前ニ御三家ノ御両家ハ有レ。水戸家ハ無キ

不審ニ思シガ。是モ帷中人云シハ。水公ニハ。火災ト聞カルト直ニ登城

アリ。其塗中ハ殊更ニ人少ニテ。常ノ大名ノ如カリシト。但シ道拂ノ声ハ勿

論ナレバ。御番所其外ノ諸人モ曾テ知ラズ。又登城ノ上申サルハ。御

急難恐入タリ。因テ取敢ヘズ。松板ニ萬板。外ニ金子何兩トカ。又カ子テ

貯ヘ置カレシ杯有テ。材木許多献上セラレシト。因テモハヤ御手傳ノ御

沙汰ニハ及バズ。コレ沙汰書ニ両家ノ有ル故ナルベシ。高松讃州ハ

此後ト云

七日書十七日  
トス是ナラシ

予又思フ前ニ永井が妻ノ望見セシ火中ニ板困メ即焚シト云ハ  
コノ水府献上ノ松堤ナルカ

三月七日 封廻状

朝五半時前  
晝九時前濟

西丸御膳所御臺御人

里村定五郎

里村勇三郎

由井久平

赤坂忠三郎

窪川勝三郎

乙津太三郎

申口一通りおかし御

如字中付居返ス

同格

田中九左衛門

同御膳所御臺御人

田久順藏

尋上  
居人紙返ス

右に評定の初麻野河内守大草安房守池田修理三右衛門安房守中

御

別紙

西丸御膳所御臺御人

相澤久助

右に不束之者白状仕所揚屋ニ在立十七日ニ申出御事ニ付  
少左

三上書  
三上書

西九所秀後存御正信云 仰付ル面々各所風掛り老申如  
仰付ル面々各所賜為に存存ルるに辰一々道修

三月

此度ノ御災難ハ實ニ御身内ハ一統ノ一ニテ老中方ハ二千両宛若年  
寄ハ千両トカ五百両トカ七百トカ 銘々上金ニ其以下モ五百名ニテトカ  
面々割合ヲ以テ上金其以下百石ニテモ有之トツ隣宅ノ萩野ナドハ七十  
一兩ニホト云敷十  
人ノ上金推計ルベシ 其後奏者番杯ハ高モ有之面々ナルガ上金為スメ有リ  
シガ近頃割付ケヲ仰付ラレシト是等モ高割ニメハ上金重カリト云  
是何カニ問ヘバ外々ノ大名ハ各勤役アリテ或ハ御番所方方火消

御馳走役御手傳等ヲ勤ムレバ奏者番ハ此事無ケレバ此度ハ総御  
手傳ノコトナル由但奏者中寺社奉行ヲ兼タル向キハ其役ニ  
ツキ入費モ有レバコノ加役ニ就テハ上金ヲ免サルトカ

此外ニモ諸侯御助成ノ一有ト聞ク佐竹侯ハ領分ニ銅山有レバ  
御造營ニツキ銅一式ハ奉リ度トノ旨福山侯ハ領産ノ席表一  
式ヲ奉リ且金子ヲ添テ御用ニ當アテ大久保仙丸故閣老  
加州ノ子ヨリハ未ダ  
幼年ナレド父加賀守申置シ譯モ有レバ領分土産ノ石御普請  
一式ニ献上セント願申セシ杯其餘ニモ有タレバ數多カレバ忌リ

三月廿四日 沙汰書ノ文

寺社奉行

西丸御普請金三十兩元上納金は各々輕通に作付

御奏者

西丸御普請に付、御子傳に作付

右に於て、老中列に和泉守に御

他在邑に面して、心在書達

或人云シハ、此度ノ御新宮ハ、當八月御月見前ニ御成就ト云

又近頃、或者語レルハ、御作事方ノ積りハ、四十箇月ニ御成就トサスル

三年四箇月ナリ、孰カ是ナル、几下ニハ辨セズ

又云フ、西城ノ焦土ハ引捨トナリ、品川御殿山ノ新土ヲ運バル、杯因テハ

今春花ノ頃モ、櫻樹ヲ手折ル、禁ナカリシト、何ニモ實事ナルカ

三月廿六日

神原式部大輔

西丸御普請に付、上納金は各々内輕通に

御施に、御思召、御内輕通金二百五十兩

上納に、御付、右御普請に、御用途ニ、御加付

水野出羽守

同文言、金一万兩上納に、御付

右に於て、白書院縁頼、老中列に、和泉守に、御

御助定に、内務集人

西丸御普請に、御用に、御付

右於芙蓉間列在回人中...

三月廿七日

佐竹右京大夫

右代佐竹右京大夫

其方似分銀山近來...

常... 在尚書...

世... 下...

右於白書院緣類老中列在和泉寺中...

大津臺榭...

福田八郎右衛門

河合左左衛門

栗原左左衛門

渡邊三郎助

石原孫助

金田左七郎

植屋金三郎

西村孫助

石田猪左衛門

石倉十三郎

荒井精三郎

河合定組以

河藏左衛門格  
河合三郎

河村左衛門格

小善左衛門



少弐重隆

大平伊十郎

羽田清之進

喜山次之助

子田之藏

小倉源之進

河合彦之進

堀誠重之進

野田寛次郎

小高定一郎

三好好三

小普請方改役

長坂号之進

坂入大三郎

豊後省藏

同本良右衛門

西丸寺普請所用込作付

右左衛門左衛門縁頼誠若中御所増山内侍

此度ハ上納金七種々ノ志有リト聞ク或人ノ云ニハ對州ハ下國ニナリカ

宗氏十萬石以上之格當對馬守ハ從四位少將天保八年冬任ス

明和申ヨリトカ命アリテ毎歲御金藏ヨリ

金一萬二千兩宛拜領コレアリ然ルヲ此節ハ官ノ御急難ニ上金ハ

爲スメ今年一歳ノ拜領金ヲ直ニ官庫ヨリ引揚ニ願ハレシト成ホト是

等七上金ノ異類也。

或人ノ語りシハ。西城ノ炎上ハ。コノ度ガ初メニハ非ズ。寛永十一年甲戌。猷廟

御上洛ノ間。閏七月廿七日。燒失コノ片モ御膳所火元ト云。至今二百有

五年。天保九  
戊戌

又或人曰。コノ度ノ御事ハ。實ニ天災ニツ有ルラン。其夜ノ未ダ更フルガルニハ

代洲河岸ノ火消屋鋪。小川町ノ屋鋪。駿河臺三所ヒノミヨリニ火ミヤタル櫓ノ望中

西城ノ上ニ當テ。赤氣空ニ映テ見ヘタレド。火事ニモ非レバ。其マニメ居

シニ果メ其曉カノ出火ニ速ビシト。斯ク記スモ憚多キト也。

又聞ク其火災ノ間ハ。溜詰ノ炭ヲ輩ハ。面々登城ナク。追手西ノ追手ノ

边。往路々々ノ口ニ固居テ。非常ク守衛シ。御先手ノ面々ハ。各弓鉄ヲ

引ツ卒テ。是モ銘々ノ持場ト覺シキニ也。陣取テ在シト。定シ非常ノ

官制モ有ラシガ。徳川家御潤浸ノ御威徳。聞クモ忝クツ覺シ

コノ火災ノキハ。定火消。方角火消。例無キ町火消。テ威御城入セシガ

却テ奉書火消ハ無ク。僅ニ明石炭一人命セラレシト。サレド消防ノ處

ナクメ。紅葉山御清ノ井ノ上屋ニ火カハル由。コレヲ防ギタリ。人皆其小分

ナルヲ咲シト。

又西城ノ御屋脊ハ。銅瓦ニメ廣堂ナレバ。火御床下ヨリ御間内ニ及ベ

ド。屋脊ヲ燃出ルヲ能ハズ。其火氣悉ク四方ニ発ス。因テ其燒燼

スルニ及ニテ。銅瓦ハ墜推テ火ニ覆ヘバ。火勢脇方ニ噴。発メ當ルベカラ

ズ。又銅瓦ナレバ。碎ケズメ長ク保テ。其下ノ火モ亦久ク消滅セズ。因テ

令有テ一兩日ノ間町火消ノ者凡其邊ニ屯シ漏火ノ禦シ爲シト

忠感ノ事ハ天人ヲ以テ傳ヘ言ハシム相國様出火ノ刻早クモ大奥ヘ

入ラセ給ヒ多クノ人ヲ救給ヒシトハ既ニ前ニ云ヘリ其時ノトヨ御側

御用御取次某水野石見守 六十七百石忽テ御小姓御小納戸ノ輩ヲ呼テ曰今君大

奥ニ入御ハ定メシ急難ニ就テ君夫人ヲ始メ妃員卑女ヲ救ハセラルノ

思召御仁心至極セリサレモ其モト等ノ頼奉ル一人ノ主君ニ離レ奉

リ斯ク非常ノ際若シ異違ノ御事有ラバ其身ヲ何如ニ爲シ假令

群妃賤女ハ數百ノ命ヲ捨ル凡國家依頼ノ御一人ヲ奈ニ迅速ニ隨

ヒ入ル丁能ハズニバ將ニ御袖ヲ扣テ奚ク諫止奉ラサル迎立腹ニケレ

バ西革ノ人々理ニ伏シ恐怖憂悶セシ中ハヤ出御有テ且西革上意

ヲ得即乱入ニ及ビシト誠ニ石州ノ直言ナリ

御本丸ノ御臺所京ヨリ入御有リニハ久キ後ナリシガ今ニ至テ御德儀

ノ高キヲ窺知リ又此度西城火災ト傳ヘ聞給フトハヤ御膳ヲ調ヨトノ

仰ニテ即調ヒタレバ早ク西丸ヘ参ラセヨト仰テ速ニ持越タルニ坂下御

門火及ニテ通路協ズ夫ヨリ又別路ヲ以テ大御所大御臺ヘ奉レ殊更

ニ其便利ヲ得喜歡ナシ給ヒシト

又是ヨリ災鎮リ大御所ハ御本丸ヘ還リ入ラセ給フト御臺所ノ仰トメ

大御所ニ隨来レル御中老ノ輩其他ヘモ残ナク御自ラノ御服ヲ賜リタリ

急難ノ中ナレバ諸婦感拜メ恩ヲ謝シ申セシト

人評ス凡女子ノ情ハ尊卑ニ限ラズ衣服ハ欲シ愛スル者ナリ御臺所ハ

其御念ナク。斯レ御仁恕ノ事アル。國家最上ノ御身ニ又其御德儀アル。有難クゾ恐ニ賢ク仰奉レリ。コ御臺所ハ御諱ハ樂子御父ハ有栖川中務卿織仁親王文化元年甲子御下向其六年冬配禮アリ

三月廿八日

阿部伊勢守

西丸御普請上納金は各内納御進

御徳也候之云々候内納金二万両納

此御普請御普請御用迄云々候加

秋元但馬守

各代秋元左馬守

同文言金一万両上納御進

昔於芙蓉之間掃部次老中列在和泉守御

三月廿九日

御進奉

梶野土佐守

御進奉

在於芙蓉之間老中列在和泉守御。若年寄中侍在

四月二日

北條遠江守

西丸御普請上納金は各内納御進

御徳也候之云々候内納金二万両

病う作れり。考後沙用途。一々在加。

右う作れり。於芙蓉。同老中伯耆。列在。中務大輔。中務。

竊ニ曰フ。前冊ニモ既ニ云シ。コノ遠州ハ。大番頭河州  
狭山一石始メ柳班ニ在テ未メ

必年ノ頃ヨリ。予ガ愚眼ニ擢拔ノ人ナリシガ。果メ後外班ヲ去テ。旗下ノ

列ニ加リ。此度又斯ル舉ル人ハ知ラズ。予ガ愚眼モ明遠ナルカト。自ラ

負ルバカリ也。夫人ハ外聞實義ト云ヘ。其實ナキハ外聞ニ施ベカラズ。

遠州克ゾコノ舉ニ及ビシ。又於予モ快トスベシ。

林子ノ答書。小條よき決断。こは。此ハ。ひき。以。序。以。弟子

と。始。て。何。ハ。ヤル。

四月三日。

松平甲斐守

西丸沙普後。付上納金。は。方。内。新。く。後。達。

伊能。を。修。之。思。乃。修。く。内。新。く。通。金。三。万。兩。

上納。う。作。れ。り。在。沙。普。後。く。沙。用。途。ニ。一。々。在。加。

右。於。伊。能。書。院。綴。類。老。中。列。在。中。務。大。輔。ト。修。く。

四月四日。

松平伊豆守

名代板倉内膳正

西丸沙普後。付上納金。は。方。内。新。く。後。達。

伊能。を。修。之。思。乃。修。く。内。新。く。通。金。一。万。五。千。兩。

上納金は仰付古御普傳に御用途ニテは在加ハ

右於芙蓉之間老中列在御務大輔御

四月六日

松平大陽也

名代松平豊後也

西丸御普傳に上納金は在加内形に後述

御禮に御所積廻ニテ思五公傳に内形は金拾万兩

上納に仰付古御普傳に御用途ニテは在加ハ

右於御書院滿老中列在御務大輔御

林カ消息ノ答ニ云今日薩侯十萬之献ニテ作ニキ喻々快々

四月七日

水野壹岐也

西丸御普傳に御普傳に仰付古御普傳に

御禮に御所積廻ニテ思五公傳に内形は金拾万兩

右於新番御返御答に御

コノ上金ノハ前ノ三月廿四日御奏者一統御手傳仰付ラレニ就テハ

一万石八百兩ノ割合ノ所水野氏ハ高一万五千石ナレバ千二百兩御手

傳スベキヲ内願メ三百兩ヲ陪シ合セテ千五百兩上金スト云

川舟司ノ或某話ル西丸炎上後御殿ノ焚瓦碎ヲ舟積シ深川洲先ノ

桑名侯ノ受所新地へ運弄ルト其事四月六日ヨリ始リ凡二百艘

七日七百艘八日四百艘運ゴシト云。

又銅瓦ノ焼損セシハ九六十俵バカリ銅坐へ下渡サル定メシ鑄替ナルベシコノ後ア未イタ何イ若イカ有ル計リ難シト。

又コノ焼土ヲ除シアトハ新土ヲ納替ルレニテ其土ハ品川御殿山ノ上土ヲ取弃テ下ナル土ヲ御城内ニ運ブトゾ是モ其事ノ起ル未タ程遠キ

ナリト。

又或帷内ノ風傳ニハ南部侯ハ五百金ノ内獻真田侯ハ三百金トカ聞コヒ又閣老ノ上席松泉州ハ同席ニハ汝汰ナク別段ニ一千金ヲ内獻セシト予モ御災ト聞クヨリ夙夜ニ心ヲ勞シ井タルガ迎モ人ニ語ランモト常ニ懇ナレバ寺島ノ叟ニ志ヲ伸ベタルニ忱トヤ容ケニ斯ノ答ヲ

得タリ。

其節御内出有作世節御内獻上ニ候入御徳ハ作ル珠ハ多遊御満足夏キニ多ク候不一通御檢極者ハ作ル依ニ十日苗裔ハ其節御按察ハ仁ハなハぬハ一寸今日退去ハ知ルヤハなハぬハ。四月六日。

即意ヲ決メ二百金ヲ叟ニ憑テ内獻シ遂トタリケル其日ハ四月十日也。

此事先頃年來ノ知已逆林氏癸言メ水魚ノ如ク云云シケレバ林ニ告ル往復。

白鬚翁御問答ハ極ニ委細承知ハはハ。兼ハ中ハ上ハ色ハ不ハ月ハ

未う来月始と云内山島一平承と云はる。沙印意を在。同て云  
以成を好む。四六

又老人云云。吾細志。像師をく。我を好む。何し拙も。希と云ん  
はる。和相くる。無事。一向。暇餘をく。略中。好消息。承知。在。

お樂と作也。四八

前内献つ。叟愈く調へて十一日。殿中ヨリ斯ト云遣シタリ。

其節沙内献く。沙品。則今日沙技。病を帯。お倚。作。端。く。中

迄。遊。御。満。足。作。分。世。節。を。沙。好。も。沙。品。く。沙。出。早。速。沙。好。く

沙。品。も。は。作。付。本。一。通。有。沙。内。足。は。有。有。作。略中。殿。中。に。思。甚。文

略也。入。在。好。む。四月十一日

此書ヲ得テ。遥望敬拜シ。夫ヨリ外内此事ニ與<sup>アツカリ</sup>シ者ハ。八宴ヲ與<sup>アツ</sup>ヘ予

モ。妾輩元ニ。劔家ノ某。学士某。申樂生一両輩ヲ招テ。祝筵ヲ設ケ

皆歡醉セシガ。翌十二日ハ。夜ベヨリ陰雨頻リナリシガ。寅刻ニ起キ

卯刻ニ出門メ。叟カ寺島ノ莊ニ抵リ。親シク昨日献納ノ御事ヲ

謝シ奉リ。次ニハ。叟ニモ懇ニ進退シタルヲ厚謝メ還レリ。コノ日ハ。爽

早ト云。蕭雨ト云。ヒ人行絶テ。路傍草木ノ青色ヲ視。堤下川水ノ逝

クヲ觀ツ。我獨リ往来スルヲゾト。孤忠單義ノ情人。知ラズ。心根ニ徹メ

竊ニ忝クゾ覺ヘシ。

四月九日。

西作事下奉り

村上与五郎



西丸普請所用此作付

右於躑躅間若年寄中出丸小笠原右様与中御

此留与在

大同付

町奉行

此勘定奉行

此作事奉行

此普請奉行

小普請奉行

戸川播磨守 長崎奉行

西丸普請所用此作付

此作付

此作付

右於芙蓉間老中列在申替大輔中御若年寄中侍在

四月十日

此勘定奉行

川路三左衛門

西丸普請所用此作付

右於沙在若年寄部屋縁頼老中列在申替大輔中御

前十一日云云早速八重洲河岸ニ告知ラセタル喜タル旨ニテ 消息

先日以外此作付一件も續在惣例前呈書案作付沙見也

と下。以。う。の。史。能。を。順。之。以。世。在。夫。より。監。視。多。く。も。う。方。起。の。也。  
此。之。を。放。障。お。師。愛。お。必。然。を。存。し。し。亦。祝。宴。も。も。成。り。望。む。の。の。  
此。の。恩。老。陪。座。を。不。仕。の。を。多。く。且。夕。寸。刻。の。暇。も。  
之。下。略。四月十三日

四月十二日

神乐坂中書

西丸御普請舟上納金は分ち内納し後達

御徳奇特くるところ思ふに依り内納し通

金三百兩上納し御付

右於芙蓉之間老中列在中務大輔中御

本堂内蔵助

同文言金千兩上納し御付

右於波之間列座同前人中御

林大學次

西丸御普請舟上納金は分ち内納し後達

御徳奇特くるところ思ふに依り通納金

之御付

右於芙蓉之間列座同前人中御

神原氏の代々久能山ノヲ掌リ駿州ニ住シ千八百石ニテ御譜代

恩顧ノ家ナリ本堂ハ由緒ハ知ラザレモ八千石常州新治ヲ領ス小

高大金ノ上納ナルハ何ナル故ヤ林氏ハ定メシ九日ニ御留守居以下  
上納ノ比ナルベシ

四月十三日

金五百兩

百人組ノ以

近藤石見守

同二百五拾兩

中興四ノ以

加藤伊勢守

西九郎普信府上納金仕立ノ事取致ハ成也

御徳奇特ノ事ニ以思召作依ノ事迄奉令

必仰召

左近少右衛門部登録頼掃部政老中列在申務大輔中御  
若年奉中侍在

近藤八千四百五十餘石加藤八千石是レ見義テラス為ル者カモシ若クハ  
浸謬ノ反カ

四月十六日

内藤豊後守

西九郎普信府上納金仕立ノ事取致ハ成也

御徳召ノ事ニ以思召作依ノ事迄奉令

上納ノ事仰付在御普信ノ御用途ニテハ左如

大同紀伊守

同文言

菅沼織部守

在國以奇特くするに之を依り金三百兩  
上納す作付

大田番江

石川伊豫守

船誠駿河守

在國以奇特くするに思ふに依り然く過

上納金ら作付

在松尾容之間老中列在申替大輔中候

本多下総守

西丸所番江舟中候より作付に御内政候

方より管一万兩上納金に寄る候に是より作付

在松尾番江申替大輔中候

内藤豊州八信濃岩村田ノ領主一萬五千石今大番頭ヲ勤大岡  
紀州八參川西大平ノ領主一萬石亦大番頭菅沼氏ハ交代寄合亦  
今大番頭參州新城七千石ヲ領ス石川船越西氏モ亦大番頭  
石川八七千石船越八五千五百餘石本多總州ハ江州膳所城主六  
萬石今奏者番タリ皆見義テ有勇者カ予ガ前ノ弟子北條氏ハ先  
登セリ殊ニ賞スベシ柳班ノ面目歟

翌十七日二八郷高ニ知門宮ノ日光ヨリノ歸路京ニ赴キ給フヲ見送奉  
ラント千住驛ニ抵リテ其御宿所ニ於テ圖々増上寺安國殿神祖御  
像宮ナリ  
別當安立院へ邂逅シタルニ必ズ十七日二八御朝拜ニ出ヨト約シ

タレバ其日ハ早曉ニ在ラ出テ辰刻ニハ増上ノ祖廟ヲ拜シ畢歸途  
 常ノ如クニ四時ニ還テ又家園ナル公祖ノ御靈祠ヲモ拜セント例年  
 ノ如ク齋詣シ夜ニ入ラバ又毎月ノ如ク浅草寺中ノ祖宮ヘモ到拜スベシ  
 ト言弁ルニ其午時ノ過ヨリ出火ナリト云觸メ人立騒グ何レナリヤト問ヘバ  
 濱町ノ當リト云因テ人ヲ走ラセ聞カ使ルニ安鍼町ノ浴屋火ヲ失夫  
 ヲリ未ノ刻頃ニハ南風強ク上邸風下ナレバ甚ク心ヲ勞シタルガ其半  
 刻ニ東風ト替リコノ時本町室町十軒店又ハ越後屋ノ巨店延焼ナ  
 ド風聞シ申ノ刻ニ鎌倉河岸邊焼亡シ尚ホ東風烈シク神田橋  
 外ナル高家今川上總介ノ邸モ焼ケテ夫ヨリ小川町ノ邊第宅多ク  
 焚亡シ申ノ半刻ニ三河町邊最中焼蔓スト聞ク

日没メハ予浅草寺ノ祖宮ヘ詣デント立出テ南ヲ顧ミレバ火光  
 猶天ヲ焦セリ路人ニ聞クニ三河町須田町神田橋通り小川町ト  
 四道ニ分レ盛焼スト然ルニ初更戌ニ及ビテハ須田町一トナリ追々  
 鎮火メ全キハ夜半子刻ニ至テ消火セリ  
 此火何ナル災カ御神忌ノ日ト云ヒ斯ク延焼シ先ズ今川ガウニテ  
 云ハバ嘗テ東照宮勅号ノ井彼祖ハ殊ニ功劳有シ家ナルラカル  
 厄ニ羅ルコソ時カ天カ又高田彦ハ神原此ホドニ萬五千ノ金ヲ上  
 テ尋テコノ火ニ悉ク其邸ヲ亡シ遠藤但州モ嚮ニ大改ニ於テ塩  
 乱ノ井防功以ナカラズメ實ニ忠勤ヲ聞シガ是等モ其邸ヲ焼却メ  
 斯ルヲ見聞スルニモ世ハ定メ無キヲニゾ思ヒヌ

是ノミナラズ此度西ノ御再造ノ爲ニ御作事コヤ竈舎ヲ鎌倉河岸ニ  
建テ御材木ヲ聚メ置シニ火及ニテ焚タリト聞又是等モ天魔ノ  
所為氏名ツクベシ

世ニ謂フニ巨材ノ時ニ獲難キモノ多ク積タルニ火移テ燒ケ  
タリト

又此頃愛日樓ヲ訪テ主人ニ聞ケバ然ラズト巨材モ竈舎モ燒ケ  
ズ小材ノ竈舎外ニ在シモノ統ニ火ニ遭シト予ハ之ヲ取レリ

又曰神田橋ノ外ナル護持院ガ原ニ構タル御作事ノ竈舎ハ何  
モ恙ナク火ノ沁込ナシト何ニモ喜バシキ言也

又内仕ノ人ノ言ニテ思ヘバ其日ハ外辺ノミニ非ズメ亥ノ刻頃ニ北風ト

變ジ御本丸ハ火塵ヲ吹カケ御舞臺ノ屋上ニ飛落タル体ニテ  
御三所公并大奥ノ御三所様ニモ皆吹上ヘ非常ノ供奉ニテ男女混  
同メ御立退有ツテ夫ヨリ夜半ニ至テ還御ナリシト是レ外人ノ聞  
ナレバ定カナラズド恐入タル次第ナリコレ全ク安鎮町浴屋ノ過ヨリ  
起レリ又聞ク其時ハ御三卿ノ第モ風根惡シク何レノ屋形ニモ皆  
立退給ヒシト云近代ノ非違トスベシ

外行ノ見レバ所々ノ自身番處ニ貼札有リ其文  
昨十日ハ小田原町及出火格初々大火トシテ程々武家  
町家多分燒失流々々西丸御普請先在る中屋並小次守り  
をいなる御用ノ木も無し板材木柱等なるものありて流々々

此の所は... 族... 田... 武家  
... 不顧... 曲...  
... 不用... 也  
... 田中... 也

四月十八日

町年考級

昨十七日... 武家  
... 板  
... 又  
... 也  
... 也

此の所は... 武家  
... 也  
... 也

四月十八日

町年考級

有... 也

四月十九日

全二枚  
時服二羽織

川路三左衛門

...

...

金二枚  
時服二

伊勢守 佐藤清五郎

金二十両

同吟味 喜山 欽之助

同新舟

右同席 欽之助

金二十両

山岡 清之助

同新舟

右新船 間堀山内

三九衛門が總領ヲ歟五郎ト稱ス一齋ガ門ニ入テ日日来学シ怠ル  
ヲ無シ平時ト彼宅ヲ訪フハ必ズ来テ塾ニ在予時ニ呼見ル年  
未タ十五ニ至ラズ眼中明徹敏剛愛スベシコノ廿一日ニモ彼宅ヲ訪テ

又值フ通問其家父伐木ノ命アリト聞ク何日ヲ以テ発途カ歟答フ  
翌廿二日出立スト然ル牛ハ御暇ヨリ四日ヲ以テ役行ス速ナリト為  
當ニ

四月廿日

高家 富山式部大輔

西九郎普信府上納金は交方内紙に記述

伊能奇特 思存 依 内紙 通金

五百兩上納金

右新更替 間老中 列在 備後 中

伊書院番 大久保 紀伊



森川下總守

高井但馬守

本多對馬守

秋田清路守

酒井隱岐守

太田運八郎

大將様御書院番迄

出仕組番迄

兜出仕組番迄

浦賀奉行

同封拜形通上納与作付

右控同席列丸同若同人中御  
御本丸西丸右大將様若  
年寄中侍迄

右畠山八五千石 番頭大久保 森川 高井 共二六千石 本多八九千石

秋田六五千石 酒井八二千石 浦賀ノ太田八三千石 合テ四萬二千石ト一旗也

四月廿二日

水戸殿家老 鶴殿 平七

西丸番詰付御上納金与成金与御内紙与御書

御徳御書 御御機嫌与 思召下候 御内紙金一兩五匁

御上納金御番付 御用途 御加与御書

右控芙蓉之間老中列控 備後守中御

松平隱岐守

各代係科彈正忠

同封拜形通上納与作付中御内紙与御書

御德也... 金三万兩

上納与作片

右控部書院編列在部同人中

佐竹右京大夫

同制并納瓦之分領多... 証細之為打延

若上中家内納通上納与作片

大久保仙丸

在代大久保兼女

同制并領多... 石献上仕... 与内納也

上納与作片

右控部白書院縁類列在部同人中

酒井大社与

在代酒井右京亮

同制并上納金仕... 与内納通金二千兩

上納与作片

右控部... 同列在部同人中

西九書院番以

曾我伊豫与

小笠原長門与

西九書院番以

小笠原若狭与

西九組番以

久見周幡与

朽木周防也

西丸此組番匠 菅沼伊賀也

本多日向也

関 橋磨也

大將橋本姓組番匠 杉浦出雲也

河徒匠 石川玄郎在番

因新拜上納金は寄与致し通上納と作存

在院同席老中仰者も大抵は侍中より列在月人中御  
御中丸西丸 大將橋本若年奉中侍在

前ノ三月十六日ノ條ニ聞シ如ク思シガ此旨ニテハ何ノ三家ハ同ジト

覺二

又松山侯ノ上金ハ是モ十六日ノ條ニ見ヘタル在邑奉書達シノ申渡カ  
何レ別段増加ヲ願ハレシト聞コエ

又佐竹侯大久保侯ノ云云ハ前三月十九日ノ條ニ云ニ愈々表立允旨カ  
酒井氏ハ一萬二千石房州勝山領主ニ小濱侯ノ支流カ小家出格何  
ニシタル由有ルカ

曾我ハ六千五百石小笠原長州ハ三千石若州ハ七千石久見ハ五千五  
百石朽木ハ六千石菅沼ハ三千石本多ハ四千二百六十石関ハ五千石  
杉浦ハ八千石石川ハ五百石合テ四萬八千七百六十石又一旗トスコノ申石  
川氏ハ小禄何ナル故有テ衆ヲ出タルヤ若クハ彼父左近將監寛政ノ

頃ヨリ御取立<sup>多</sup>出身久十九五因テ親ノ志ヲ継シ者カ。

四月廿四日。

高家

宮原彈正大弼

西丸御普信付上納金法家方内納之御意

御禮奇特之より思召候之御意通金百兩

上納之御意

同

畠山飛騨守

同文言 金三百兩

同

大澤右京大夫

同文言

浦賀奉納

池田將監

西丸御普信付上納金法家方内納之御意

御禮奇特之より思召候之御意通金

之御意

右於芙蓉之間掃部治老中列在備後守中御意

九鬼長門守

西丸御普信付上納金法家方内納之御意

御禮奇特之より思召候之御意通金

之御意

右於新壽の御意

四月廿五日

高家 横瀬駿河守

西丸御普請付上納金は多分内貯し御意

御徳奇特くするに思はん候し内貯し通金二百

上納し御意

同文言 由良橋磨石

右に芙蓉の間老中列丸中務大輔中御

頃ハ日日上金陸續ス宮原八千四十石 畠山ハ三千百石餘 大澤ハ三  
千五百六十石 浦賀ノ池田ハ三千石 九鬼ハ大名 摂州三田領主 三万石  
石予ガ致仕前 柳班ノ旧友タリ 今ハ内朝ニ入テ 斯ク忠謀ヲ爲ス 流

石ハ舊朋ノ所ナリ 横瀬由良ハ俱ニ千石 献黄ノ數合テ七千二百餘トス

前ニ記シタル御殿山ノ土ヲ炎燒ノ跡ニ移シ入ル、一實説ト覺ヘテ此頃

聞クニコノ山ヲ堀タルニ稍ク深ク穿タレバ土中ヨリ古甕ヲ堀出ス其内

ニ枯骨有リシト一説ニハ石棺ヲ堀出メ内ニ人骨ノ首ノミ有シト云 因テ

内仕ノ人ニ聞ケバ西城ノ燒土一尺バカリヲ除ケテ彼山ノ新土ヲ移容タル

ガ殿山ノ土ハ此事ニテ穢有リト又取除ケ復御普請所ノ土ヲ五寸トカ

堀去リテ何ヨリカ新土ヲ容ラル、杯隠倫ノ耳ニハ諸説ノ響ノミ有テ

其正音ヲ聞クニ由ナシ

又聞クニハ西城ノ中ニ以前ヨリ今ニ至テ其處ニハ曾テ手ヲツクルヲ為

サル場所所在シカ此處何カ故有テ其地ニ手ヲツクルニ及ビシヲ掛リノ

有司其フハ何カバナラント議セシヲ大御所ノ仰ニ矣ニシテ忌ムララシ當  
用ノ所專ラサレバ憚カラス手ヲツケヨト命有リテ四月廿三日ニハ其事ニ  
及フト御小納戸頭取美濃部筑前守掛リニテ斯ク聞シト能役者ノ某  
正シク語レリ。

大御所公斯ク御英断ナレバ僅ノ穢ナド云シ以テ大役ノ妨ヲ為スハ  
定メシ有司小量ナルヨリ起ルカト疑ヘリ。

又内仕ノ某語ルハ西城ノ大奥御休息トカノ御庭後ノ林中ニ錦木  
トヤラノ巨木アリ年疊タレバ圍ニカイニ及フ其樹其處ナリトメ是迄  
注連ナト懸テ有シガ此樹モ燒却メ其地此度ノ御入用ニナルニ因テ  
斯ノ議論アリシト。

又コノ燒木ヲ伐去ル其樹根ヨリ白氣立騰リシト是等ハ此木ニモ  
限ラズ總メ大木ハ如此者也ト又尋テ其下ヲ堀ルニ石垣ノ如ク思上テ  
凡二間餘モ堀タルニ未ダ始ノ如クニメ其異有ル丁莫リシト。コレ四月廿八  
日ノ話ナリ

卯月ノ末ノフニテ芝二本榎ニ高野山ノ在番所アリ爰ニ在僧ノ僕目  
撃メ話レルハ前ニ云シ御殿山ヲ堀ル其土中ヨリ五輪塔ノ高サ二尺五  
六寸ナルニハ凡ハ不可知ノ字ノ有リ十二三基堀出シタリ然レモ是ニテ  
ハ不淨ヲ以テ其事ノ止ムシヲ恐テ此役ノ人足頭竊ニ人ニ知レヌヤウニ五  
輪ヲ皆打碎キ捨タリ殊更ニ古色ナル物ニテアリシト又外ニ石槨モ出タ  
ルニ其内ニハ甲冑有リシガ冑ハ緑鏽ヲフキテ古タル中ニ勝ニ大黒  
ノ紋金色存メ見ヘシト人謂フ孰カ新田ノ一族ノ旧物ナラント又別ニ口ノ

潤三尺餘ナル大鍋ノ如キ鉄器モ出タルガ其内ニハ折戈破矛ノ類ヲ積ツメ篋コミ有リシヲ是等ハミナ即ザニ復埋メタリト是モ目撃手ノ由ナルガ何イハモ惜キヲテ克ク穿鑿シ遂ニト人語ヘリ

採トリ雜ミタルヲナガラ前ニ云シ十七日ノ晚景大城中吹上ヘ御立退ノ中内仕ノ某外ヨリ御城ヘ馳登タレド御所ノ御在處ヲ知ラス又殿堂ノ内ハ寂トメ人無シ因蒼皇徘徊スル中一僕張燈ヲ挑テ来レリ某問フ御所在ハ何カニ僕答フ知ラス時ニ夜闇メ四方ヲ辨セス某手ニ張燈ナシ迺曰其明ヲ借セ僕應ゼズ某即コレヲ奪ヒ走テ吹上ニ赴ク途ニメ婦女ノ若松大紋ノ衣ヲ著シセ八人御オン駕カゴヲ昇来ルニ值フ聞クニ御臺所ノ立退給フナリト御後ニ尋テ大御臺所アリノミヤ有宮ノ御駕来某迺路傍ニ平伏メ御駕ヲ過トホシ

稍々闇路ヲ行クニ遙ニ燈光如星キヲ瞻ミル急キ行クニ果メ御所ノ行在ナリ某初テ心ヲ安ンジ是ヨリ護衛メ夜半ニ大城ノ御坐ニ還御ナリシト亦取交タル言ナカラ炎上跡ノ地ヲヒキナラスニ黒蟲夥シク出テ人夫甚々困苦スルヲトゾ是ハ火後ノ湿氣ヨリ生ズルナラント又目撃手ノ者ヨリ承傳ノ言ナリ

又普ク人ノ知ル所白塩硝ハ古屋ノ床下ニ生ズル物ニメ其性火ヲ惹クヲモ亦人ノ所知ナリ此度西城ノ炎上ハ百有餘年ノ後ニメ御建屋タチモモ殊ニ年歴タレバ其御床下白塩硝多ク有タルナラシ夫故カ焼出ノ中火ヲ引ヲ殊ニ速ニメ炎氣ノ猛烈自餘ニ勝レリト何ニモ斯ク有タル當ニ

本草啓蒙云ヒヨクニセテ焰消ハ多年古屋内地板下燥ケル地上ニ生ズ新宅ニハ

生ゼズ色白クメ霜ハシラノ立タルガ如シ或ハ稀ニ結ニテ方塊ヲ成ス  
モアリ火ヲ點ズレバ必燃ヘテ下ニ移ル

又コノホド岸和田侯ニ逢タレバ過シ炎上ノ話ニ及ビ侯曰某モ八手ノ  
中ナレバ火掛リ逆御城入メ防火ニ及タルニ其場ノ働ハ寔テ論セス唯目  
モ當ラヌハ婦人整々ノ衣服ト覺シク置積シタルニ火移テ焚有ル  
ヲ人見タルバカリニメ誰モ救者無カリシト是モサゾト思ヒハカリヌ

傳ヘ言ハ水戸袁公ノ未亡夫人 峯壽院 公主 仰有テ明朝ハ火災ノ厄アラント

水府ノ女中ヨリ西城大奥ノ御祐筆所へ申越有ラレシヲ無根ノ浮説トメ  
言上ヲモ遂ズ有シカ果テ御コトノ如ク彼災ニ逮ベリ公主何ニ抑テ斯ク  
仰セ有リシヤ

前ノ十七日ノ火ハ安鍼町ノ浴屋ヨリ出シテ或人ノ云ヲ聞ケバ其前西城炎  
上ノ燼餘梁柱ノ類所謂御拂ト云フニ為タルヲ彼浴屋ガ買取りテタ  
キタル故其浴主ガ汚身ヲ以テ大城ノ遺物ヲ穢シタル災ニテ斯ク燒家  
ニ逮シト予評スコレ上ヲ尚フニ似テ然ラス若夫奚ト云ハド此火ノ未諸方  
ニ及ビ竟ニ大城御立退ニ至ルハ何シノ祟ツ或人ノ説ハ上ヲ訛ト謂テ可ナリ  
四月廿七日

西九所裏門番

齋藤内藏

西九所裏門番

筒井平左衛門

西九所普請付上納金仕立なるお紙の底を

御徳奇特くするに思召の儀に御上納金



と作付

右於芙蓉間老中列座中務大輔中御。是年寄中西丸に侍座。

寄合

小出主水

大岡土佐守

西丸番侍舟上納金は分与申取の度也

所徳奇特より思召依新色上納金

と作付

右於菊間老中列座中務大輔中御。是年寄中侍座。

右齋藤八千石筒井八百廿石小出八五千石大岡八二千石合テ一萬

三千四百二十石上黄ノ數幾許カ

四月廿九日

細川執中守

西丸番侍舟上納金は分与内新色

所徳也成湯横廻り思召依内新色

八萬五千兩上納り作付老湯番侍所用途也

差加分り作付

右於沙白書院縁類老中列座中務大輔中御

西丸番書院番以

淺川安藝守

高力丹波守

菅谷山城守

左將様書院番

浅野壹政

日光寺

山岡但馬守

福生出羽守

大浦坂

酒井真之助

西九郎普徳<sup>上納金</sup>江<sup>方</sup>松<sup>辰</sup>彦

伊佐奇徳<sup>上納金</sup>

与<sup>作</sup>知

左<sup>美</sup>奈<sup>間</sup>老<sup>中</sup>列<sup>在</sup>同<sup>人</sup>中<sup>御</sup>

寄合

北條左衛門

深津清左衛門

同文言

左<sup>美</sup>奈<sup>間</sup>老<sup>中</sup>列<sup>在</sup>同<sup>人</sup>中<sup>御</sup>若<sup>年</sup>嘉<sup>中</sup>侍<sup>在</sup>

間部下總書

西九郎普徳<sup>上納金</sup>江<sup>方</sup>松<sup>辰</sup>彦

伊佐奇<sup>上納金</sup>徳<sup>上納金</sup>

与<sup>作</sup>知

与<sup>作</sup>知

左<sup>美</sup>奈<sup>間</sup>老<sup>中</sup>列<sup>在</sup>同<sup>人</sup>中<sup>御</sup>

細川侯八五十四萬石前ノ薩侯十萬石ト比シテ八次第穩當力薩

侯ハ高七十七萬八百石

次ノ滝川ハ四千石。高カハ三千石。菅谷ハ四千五百石。浅野ハ三千石。山岡千石。稻生千五百石。酒井ハ七千石。北條三千四百石。深津ハ七百石。合テ二萬八千石。上金ノ數奈シ。

間部<sup>越前西歸</sup>侯ハ<sup>江五島石</sup>鴻臚ヨリ京尹ニ上遷セシカバ前ノ鴻臚ノ上金三

千兩ノ上ニ加ヘシ者カ。抑老中方ハ各二千ト云ニ准メ斯ク上納有リシカ。隱倫辨セザル所也。

又北左ハ近頃予ガ莊ノ東近。松倉町ト云田郊ニ邸ス。因テ人使メ上數ヲ探ルニ百五十兩トカ聞ク。是等内願ニテ上納スレバ一統ノ高割御用金ハ御容捨ナド云。

又コノ北左カ家ハ小田原北條ノ嫡流ニメ。今大番頭<sup>狭山</sup>ナル北條遠州ハ

還テ三男ノ家トゾ。因テ祖先ノ法事焼香ノ中ハ。此北左大各ノ家ヨリハ一番ニ焚薰スト。

又前三月十六日ノ條ニ見エシ。松平加州ヨリ。桑名侯以下御手傳ノ命有シ。此間或人ノ云シハ。桑名モ守國院<sup>樂翁ノノ頃ニ似ス</sup>。

金<sup>ウハバ</sup>ノ上<sup>ウハバ</sup>部<sup>ウハバ</sup>バカリニテ其實ハ一向ニ當テ無クメ。終リ何カ成ルベキヤトノ模様ナリト。真偽ハ論ゼズ。吾輩モ縁家ニメ且旧盟ノ人ナレバ守國院ノ故志ヲ追慕メ絶ヘサル耳。

同月日左ノ事アリ。某示ス。因其終ヲ頭ハス。

四月廿九日

遠嶋

西丸内膳部少輔

相澤久助

四十二

役及放  
押込

田久順藏 四十二

同表方一書

依田彦三郎 二十九

同表方一書

里村勇三郎 四十五

押込

由井久平 六十三

窪川滝三郎 二十八

病後身疾小川孫吉郎

里村定五郎 三十二

市藤右三郎 四十三

乙津太三郎 四十五

高橋金三郎 四十四

世構

同格

田中九左衛門 六十六

同表正書和組以

山口正藏 六十六

同表正

中島伴三郎 六十一

同表正書和組以

松坂長之助 三十二

同表正書和組以

出口鉄三郎 四十

同表正書和組以

井上平藏 六十一

右様活定雨初麻野河内守大草安房守地回修理之令  
安房守中

中ノノ 覺

西元四百年和比表和以

磯部平左衛門

去月十日西九段上流より一件、舟支配に者あり

此江流より作舟の者あり、遂に江流の者あり、去月九日此江流

より舟用多し、此江流の者あり、舟の者あり、元々此舟

より、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり

申舟方の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり

作舟

中村殿左衛門

柳原殿十郎

去月十日西九段上流より一件、舟支配に者あり

此江流より作舟の者あり、遂に江流の者あり、去月九日

此江流より、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり

向之江流より、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり

舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり

舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり

舟の者あり

四月

右に於て参政相模守宅、同人申渡せし由

閏四月四日

加納遠江守

西九段上流より、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり、舟の者あり

御柱之儀に於て也石の傍に肉形に金五兩

上納す作舟に沙等語沙用途に二と居加へ

高家

武田大膳大夫

同文言奇特に及り也石金二兩上納す作舟

織田大藏大輔

有馬左部大輔

同文言金百兩充

右に芙蓉の洞老中列座備後守中御

沙小性也番頭

逸見甲斐守

田安殿家老

朝倉播磨守

後鳥羽能登守

宮内少輔家老

本多佐俊守

三上筑前守

刑部少輔家老

佐野日向守

大久保筑前守

小普請支配

丹羽五左衛門

戸塚傳前守

久留十左衛門

夏目日向守

藤懸未女

工原伊賀守

諏訪庄在也

左大將權時性記香江抄備出云云他云云

同文言

右於同席老中侍中列在同人中  
堀田攝津守侍在

飛彈郡代

大井帶刀

山代友

山下大膳

川崎平左衛門

中奥山番

朝倉賢次郎

武田与左衛門

日向七郎

西元正院番御侍

同部之祝

松田益右衛門

山代官

青山九八郎

大草右近

平岡文次郎

高山又藏

同文言

右於同席老中侍中列在同人中  
堀田攝津守侍在

加納八萬三千石。上総一宮領主。今伏見奉行高家。武田八  
五百石。織田八七白石。有馬八五百石。番頭ノ逸見八三千俵。田  
安殿ノ家老朝倉五百石。渡邊三千百石。宮内殿ノ本多三千  
石。三上六百石。刑部殿ノ佐野千九百石。大久保同高。小普請支  
配ノ丹羽千五百石。戸塚千二百石。久留千七百石。夏目千六十  
石。藤掛四千石。土屋三千石。組与頭ノ諏訪八二百五十石。御郡  
代大井八百五十俵。御代官山本八百石。川寄百五十俵。中奥  
御番朝倉八千石。武田千七百石。日向二千八十四石。西丸御書  
院番ノ岡部。松田。今不詳。又御代官ノ青山不詳。大草百五十俵。  
平岡不詳。高山八十石。

有馬以上四氏。高合テ一萬四千七百石。上金九百兩。逸見以下十四氏。二  
萬七千七百十石。納金ノ高不詳。大井以下十二氏。高未詳。所書六千百  
十四石。納金モ因テ定カラズ。皆善ニ與シ。仁ヲ蹈ハ者力。  
同月日封廻状。

依父ノ科中逃放  
十五才迄脱ルハ能キ

元西丸御書院番頭久助伴

相澤慶太郎  
成十歳

西丸御書院番頭

里村勇三郎

御用多弁

由井久平

押込屋允

病守符各代

乙津太三郎



窪川滝三郎

右ノ活定由初麻野河内守大草安房守池田修理之令安房守  
尸御

閏四月五日

松平出羽守

谷代堀田左京亮

西九郎平長三付上納金仕分内紙一巻

御徳也成少横廻り思存依金三萬兩

上納り御付在少考法一少用途一成一少格加

多し御書

右於沙白書院綴類老中列在。傳後中御。

閏四月八日。

有馬滿丸

各代加納政次郎

西丸沙書院上納金仕家内新編

御禮也。然。以思名傳。内新編。金千兩病

以作月古沙書院。沙用途。一。以括加

大沙番

建部内通

同文言金六百兩上納

金二百兩

同

戶田隼人正

西丸沙書院上納金仕家内新編

御禮也。然。以思名傳。内新編。金千兩病

以作月古沙書院

右於芙蓉。間老中列在。傳後中御。

諸府町在

牧野左衛門

各代太田運八郎

立花丹下

同文言

右於同序列在。同前人中御。总年考中侍在。

寄合

松平邦之助

伊丹駒次郎

酒井新三郎

同文言

右於菊之岡列在岡前同人ノ御ノ侍能同前

西丸御所 宗族伊丹 宗族伊丹

西丸御所 宗族伊丹 宗族伊丹

同文言

右於伊丹御所御類被若中ノ御ノ侍能同前

松羽州ハ松江 宗族トメ拾八萬六千石三萬ノ献モ有ルベシ満丸ハ上総

五井ノ領主一万石定メシ幼年ナルベシ何ニメ此舉アルヤ此先徳庵紀

州ヨリ出テ大統ヲ継給ヒシ牛隨ヒ参ラセシ家ナレバ重恩ニ依テ然ルヤ  
各代セシ加納モ同ジキ家ナレバ也建部ハ一万石播磨林田領主戸集ハ  
五千石牧野ハ二千五百石立花ハ三百俵邦之助ハ五千五百石餘伊丹ハ  
三千石酒井モ三千石西丸御所小性組鈴木富永禄數不詳所有ノ献  
員三萬千八百餘其餘ハ載サレバ今詳ニセス皆亦継之者善カ  
閏四月十一日

德府御城代

久保之傳正

西丸御所 宗族伊丹 西丸御所 宗族伊丹

御徳奇特ニシテ思ハル儀ノ御ノ侍能同前

右於芙蓉間掃初以老中列在備後守中殿  
大久保八五千石。

閏四月十三日。

松平伊賀守

西元寺傳并傳之傳与作并小寺寺社在并

与作并小寺在所用中先上或上受金三千兩上納

江武与初之包与作并

右於芙蓉間老中列在備後守中殿

京都町在并

佐橋長門守

本多左内

西元寺

梶川左内

西元寺並書之

秋山祺左内

同敷并并上納令以并初之傳在

御極并特之与之与思并并傳之初之通

上納令与作并

右於同席老中伯耆守大炊政列并因人中殿之若年寺中

西元寺侍丸

奉合

片桐帶刀

同文言

右於菊之間老中列并因人中殿之若年寺中侍丸

伊州八万三千石。信州上田城主佐橋八千石。本多二千石。梶川二百石。秋山三百俵。片桐八千二百石。前十一日ヨリ此日ニテ上田侯八別ニ高一萬二千二百石餘。三百俵。コノ納金茲ニ不詳。閏四月十八日。

寄合

淺野金之丞

西九郎普信并上納金は分る取致ゆ辰也

御徒奇特く、子に思召候、秘に上納と御旨

右控菊ノ間老中列在。備後守中御。若年号中侍在。

淺野八千三百石。上金未詳。因ニ云フ。前ニ不詳ヲ以テセシ。大井以下ノ

上金。大井帶刀 百五 二百兩。山本大膳 八百 七拾兩。川崎平右衛門 百五 五

十兩。青山九八郎五十兩。大草右近 百 五百兩。平岡文次郎 七十俵 五

十兩。高山又藏 八十 五十兩。納金合テ九百七十兩。 閏四月四日 上納濟

平戸藩  
樂府堂藏書



閏四月廿二日

大沙着以

永井信濃守

名代加納政次郎

西丸所普信守上納令信守内給と致意 沖徳也

と然と之在信守内給と色令止而納と仰也

若沙書信守用途と一と在相公

右於莫暮之間老中列在備後守也 傳

作海守形

篠山十之丞

鳥居八右衛門

作海守形

中山五郎左衛門

平石譜 樂藏書

森山安齋

勝 志摩

三浦土佐

内藤近江

近藤頼母

武田玄庫

深津弥七郎

横山土佐

蜂屋左門

山本宗金十郎

西九所迄

目録番

伊先子

伊良番

江口院番長同伊先子

西九所迄若原伊先子

関播磨

奥伊先子

松島春十郎  
大津弥三郎  
田中休藏

同以本殿公儀 御用奇特

秋上納付

右於同席老中御番大炊頭列在同人中御用 若年兼中  
西九所侍在

若合

神保機三郎  
宮崎平四郎  
横山内記

伊良番土佐子



同文言

右於菊之間老中列我同人中御一老年寄中侍在

官内御及若江格  
用人

紅林勅解由

同用人

本多在常

泉中二助

同文言

左於沙古部御縁頼誠初書中御一

大心齋

富事念紀多氏

後田伊右衛門

沙上性記

秋田談話書記

小栗又一

永兄健次郎

西丸沙上性記

西井隱談書記

户田寛十郎

易合平四郎其飲  
西丸沙上性記

園播磨書記

宮崎次郎兼

西齋格  
心齋齋

村地左大史

宮内卿書記

足田三庫

同西上十人總次

河内仁三郎

同文言

右於同席同人中後々為年中侍兒

始ノ永井氏ハ一萬石和州新庄領主コノ祖ハ嘗テ高名ノ傳八郎ナリ  
其ニ次テ篠山ハ二百俵鳥居百五十俵中山千石森山四百五十石勝  
四百十四石一斗三淵千二百四石内藤千石近藤三千石武田五千三百  
十八石深津七百五十石横山四千五百石蜂屋七百石小笠原七百石松崎  
五百石大澤二百五十俵田中百五十石神保六千石宮崎五百石横山カ  
父上納知レズ紅林五百石本多五百石泉本百俵横田三百石小栗二千  
五百石永見千二百石戸田七百石平四郎ノ子宮崎御番定高三百俵  
村垣七百石足田河内祿數知ラズ始ノ永井侯ヲ除テ篠山以下數氏  
石高合テ三萬二千五百八十六石一斗俵高千俵上金ノ數未詳ニセズ

閏四月廿五日

駿府所定書

松平吉近

名代大田運八郎

山田幸外

柴田日向也

名代戸川橋磨也

百人組ノ内

遠山忠藤云也

中奥所中

仙石能登也

松平織部也

戸川因幡也

山田所書

石川与次也

高井玄水

少為少者秀次序

少為定吟味段

田口玄郎在野

西九少先色

窪田玄水

少俊番

伊丹三郎在野

永井求馬

松平伊勢守

村上信濃守

少言洗者

少為定吟味段

向井六左衛門

少性組

秋田流政公絶少以

服部五郎在野

西九少裏少者少以

小出大伴

少為定吟味段

中野又玄湯

村田幾三郎

根平善藥

西九少善傳身土柄合江守与出秋小段在 少為定吟味段

少為定吟味段 少為定吟味段

右控更替一問 伯耆守大炊次列在備後守中 總年寄中

西九少侍丸

寄合

勝田貞次郎

同文言

右於菊ノ間列在因菊同人ノ御ノ总年号中侍光

少小仕能

石川大隅守能

大久保与三郎

西丸侍中仕能

堀井徳信守能

堀ノ監物

伊丹守能

江連小市守能

宮内少将守能

伊丹次郎守能

同文言

右於菊ノ間列在因菊同人ノ御ノ总年号中侍光  
中西丸共侍光

此日松右八二十石柴田七二十石遠山六千五百三十二石餘仙石二  
千石松織三千五百石石川三千石石川三百三十石高井三百俵田  
口百俵窪田四百石伊丹千石永井千石松勢二十石村上五百石向  
井三百俵服部三百石小出五百石中野百五十俵村田七百五十俵根  
本知レス勝田三千石大久保七百五十石保々八百石江連伊丹知カラ  
石高知レ分合テ二万九千六百十二石餘俵高千俵

五月二日

松平大和守

名代松平大藏大御

西丸御書院金箔差上中云云内紙と紙を御徳也

御書院と云々内紙と包上納り作付也

御書院と云々差加作

右於御書院海老中列丸紙若中御

是等ハ奇ナリコノ箔定メシ數千萬ノ下ナルベシ何ホドノ入用力

松平主殿

名代京極右近將監

同封并上納合仕言与内紙と紙を御徳也

思存御と内紙と包合一万二千兩上納り作付也

御書院御用途ニ下差加作

右於御書院縁頼列丸御同中人御

大市番

戸田清政

名代柳屋但馬守

同文言五兩

右於足卷間列丸御同中人御

和州ハ武州河越城主十五万石主殿ハ肥前島原城主七万石戸田八万石

大垣侯ノ支流濃州大垣新田

是等ノ一ニ就テ云ニハコノ五月ノ戌始メ一目橋ヲ南ニ行シニ大川ノ邊ノ

廣處アルニ圓石ノ自然ナル又ハ方形ニ鑿タル中大ノ切石ナド數百千

積累セリ其廻リニハ竹柵ヲ設タル外ニ昇ヲ建テ白地緋色ニ西御  
丸御普請御用ト深テ大久保彦ノ藤丸ニ大字アル家紋ヲモ深タリ  
コレ前段ニ記セシ故閣老加州ノ志ヲ継テ子仙丸ガ上石ノ場ナラント  
去<sup>カリ</sup>ニシ有サシ思メグラメ<sup>アハレ</sup>哀ニ<sup>ス</sup>ズ見<sup>ス</sup>過<sup>シ</sup>

○紅毛人<sup>ノ</sup>都下ニ來ルハ近來ハ五年ヲ隔ツ因テ當年三月四日都着セ  
シニ西城ノ炎上ハ其十日ナレバ紅毛人モ旅舎ニメ正シク其時説ハ聞タリ  
然<sup>ニ</sup>メ御本丸登城拜禮ハ十五日ニメ廿一日ニ都下ヲ去テ還途セリ其間  
ヲ蠻人<sup>ノ</sup>言トテ人傳ヘシハ

云フ此度都城國王ノ御居火上下聞クニ纒ニ時ヲ族ズメ火消セリト  
紅毛國王ノ屋室先年出火セシ<sup>テ</sup>有シガ火滅セザル<sup>テ</sup>十餘日ニ及ヘリト

静評スコレ紅奴吾ヲ卑<sup>イ</sup>メレ吾邦ノ家室ハ皆材木紙漆ヲ以テ  
造ルサレモ其美觀ツベシ然レモ火ノ爲ニハ消滅速<sup>ニ</sup>シ蠻王ノ居室皆  
瓦石鉛鉄ヲ合セ構フ殆<sup>ド</sup>禽獸ノ巢ノ堅キカ如シ故ニ火ニ遭ト雖モ  
消燼易カラズ因テ斯ク餘日ヲ經全ク尊キト云フニ非ズ

又竜吐水ヲ見テ云シハ某等ガ國貴人ノ屋ハ峻キ<sup>テ</sup>數尺ナカク吾邦ノ  
竜水ニテハ及バス又中天ヨリ雨ノ降ル如クナル吐水器有リト

静評ス人コノ蠻奴カ<sup>ヲ</sup>以テ我レ彼國ニ及バサル<sup>テ</sup>ニ思フハ却テ笑  
ズシ彼國ニハ峻屋アレバ高升ノ水器アリ吾邦ハ吾ガ吐水器ニテ  
足レリ矣<sup>ハ</sup>彼ヲ尚バンヤ又雨降ノ器ハ假令有リタルモ其人ヲ頼<sup>マ</sup>  
ズンバ無用ノ器ナリ吾ガ一口ノ吐水ニテモ勇志銳氣ヲ以テバ峻屋

連舎ト雖モ消火ニ至ラシ雨降ノ器羨ハニタラス

唯蠻人ノ歎シタルハ町火消ノ服セシ筒袖ノ長キ著モノニ目ツキテ烈火

ニ近ツキ働防セシハ斯ク有ベシ迎蠻奴五ニ指視メ有リシト

静評ス彼漢等ガ消防ノ体見タキナリ

○是ハ訕言犯上ノ罪恐ルカ時實モ有レバ雞肋トス

癸句 ほかくと處の中は朝日

焼舟をよもよめり

さき帰る羅紗乃相織さ人あよ

大鼓に盤木喚漕とらり

青月もむづ免の音乃あびす

町人は乃衿中とらん

大谷乃錦を飾る防う那

吹上吹味皆帰るをり

コノ吹上ト云シハコノ時御所々々様御小納戸ノ人御撰ニテ御側衆ノ

撰ヨリ若年寄ノ撰ヲ登夫ヨリ吹上ニテ御透視ノ有リ已ニ御撰ニ

成ラシ迎是ニテ撰出シタル者共予ガ未家ノ中ニモ其人有テ未明ニ

彼所ニ到タルガ其早朝ノ出火ニテ中々此御事ニ及バズ皆各退還

リタルヲ詔フ

草鞋にぞゆ敷とありくま配向

怪我とともなと錠はのち

若駕著て隠居の女房急ぐ

一枚忘物月おすは汗

納戸をいかにして人話あや

身のおまの云次う話さ

言體もひりむら思ひあ

先のあけく線め居訓

言をらくあまのよ花見を三丸

啼啼を遊多り田螺田楽

閑帳と遊里へ響く毒の鏡

祖子乃喧嘩の多し節盛く

是ハ御本城ノ女員ハ御代々ノ浄土ヲ尊崇セラレ西城ノ妃輩ハ新ニ  
法華ヲ信仰有ルト今世上ニ泛説セリ

寐忘れし枕を傳ふ付両癖

秋を因何と離さ雪隠

庄おてはさ世ささく旅鳥

市南売の中へお古る鉄

改てあ戸の錠をは言の月

持量もせは契乃廣庭

松枝千一庵子権操の歌をよ

世間をいれし少燈の材木



周り影射とにうく作る事

後夜帯をい浮む鳴る

如名の鏡張をする伊賀の者

庚の中うらひよいと後形

加泊りさわをさる者の若衆

糸指ぬかすごひぬ建

花やうぬぬをさる人の若衆

諸多るるゆに鳴くを藤か

○痴人の夢ヲ説ト聞シモ今ノウヘニ齊東野人語ルカノ炎上ノ後何カ太公ノ仰リ有シ片未父年若キ國中桔梗花ノ閣老時態ヲ以テ

諫言申セシヲ太公御心ニ應ゼズト御坐ヲ起セ給ヒ入御アラント爲給ヒシヲ是モ桔梗花紋ナル出頭御取次ノ御側衆御袴ノスツシ扣へ奉リタレバ太公ノ仰ニ我ラチト年若クナリテ思ハズ心得透タリト有リシカバ桔梗花ハ忝ト拜伏シ圓中桔梗花モコレヨリ不難ニ御前ヲ退シト人云フカル時此体ニテ若シ入御アレバ諫争ノ人ハ自又スルヲナリトゾ是等ハ誰ガ何ヲ引テ謂フゾ斯ク物語ルト覺ヘテ夢サメタリ惟ヘバ三秀ト謂フベキ哉

五月十一日

大坂山定齋

米倉丹後守

名代米倉大内藏

西九所普濟舟上納令仕守内親之役是所也

之候与思古候之内親之色令其而兩上候

在所旁候之御用途三上候加

右控芙蓉之間老中列在執務中御

大書以

松平旭馬守

右代律田美濃守

横田筑後守

右代横田新三郎

長崎奉行

久世伊勢守

右代石川播磨守

中身中候

戸田近江守

佐野大隅守

徳永伊豫守

伊澤美作守

諏訪備前守

下田幸次守

本田玄祐

戸田久助

右代長門守

平書院藏

少平長子吉延次郎 神谷八景

右大将権少言院番

成跡少言院番 久具又三郎

少言院

久具因幡守延次郎 依集之助

朽木因幡守延次郎 大河内金一丞

西九少言院

西丹隠岐守延次郎 間宮庄之助

二九少言院

松平左衛門尉 田中兼之助

牧志麻子

金田帯刀

河尻重八郎

丹波縫殿

内山七之助

戸田五助

少言院

同以奇特... 上納言

右大将権少言院中侍

寄合

久世三四郎

同文言

右控菊之官。老中列在。同人中。御。若年寄申侍在。

御附人

刑部右衛門人吉政兼

新村藤三郎

同品書以用人兼

吉本傳八郎

同品用人格

山本老郎大史

同文言

右控菊之官。老中列在。同人中。御。

御附人

刑部右衛門人吉政兼

向坂清之助

清野助左衛門

御附人

刑部右衛門人吉政兼

右川助次郎

西九郎書院番

小笠原若根守能

稻葉大膳

御附人

刑部右衛門人吉政兼

可兒孫十郎

御附人

刑部右衛門人吉政兼

飯田庫三郎

同文言

右米倉度八万二千石武州金澤領主次テ松但八五千石横筑九  
千五百石久世勢州三千五百石戸近五千石佐大三千五百石德豫二  
千五百石伊美三千二百五十石諏備五千石下田二百俵本田三百俵  
戸久千五百石落長千七百石神谷四百石久貝又九百石佐々集七  
百五十石大河内七百五十石間宮八百石松左尉五百石田竟百石牧  
志三百俵金田三百俵河尻三百俵井関二百五十俵内山二百石戸  
田五百俵久世三四五千百十六石新村二百俵青木百五十俵山本  
二百五十俵向坂清野戸川稻葉今知ルベカラズ可児二百俵飯田役  
料二百俵米倉ヲ除テ松但以下飯田ニ至テ高合テ四萬九千九百六

十六石俵高總テ三千百五十俵コノ中向坂ハ嘗テ藤十郎ト稱ス  
千石戸川ハ主水千五百石稻葉ハ茂橘二千石若クハ其家トセバ  
合テ四千五百石ヲ陪ス總石合テ五萬四千四百六十六石清野疑  
ラクハ浅野ノ誤然レモ其家ヲ詳ニセズ

○コノ月十五日ナルニ鳥越邸ヨリ西國橋ノ方へ還ル路ノ呼バ左衛  
門河岸ヲ行シニ川ヲ隔テ浅草見付ケ御土居ノ下川邊ノ廣地  
アルニ塲所ヲシツラハ切石ノ方ナル大石中石數十ヲ處々ニ累置タ  
リ中ニ白昇ヲ建タルニ紺字ニ西丸御普請御用ト染テ下ニ大久  
保ノ家紋ヲ出セリコレモ亦仙丸ガ上リシ領分石ニメ前段ニ記セシツ  
目ノ石塲ト同ジ又哀ニカ見過ヌ

○コノ度西丸炎上ノ後御新堂ニ就テハ御住居ノ處モ替レバ在ツル  
井ヲ三ツトカ埋メ新ニ井ヲ四ツトカ穿レシト云夫ニ就テ御普請方ノ  
傳ニハ井ヲ埋ミアトハ必ズ梅ノ樹ト葺ヲ植ルトゾ此度モ斯クセシト  
カ云是ハウメテヨシト謂フ祝言トゾ

○コノ乾冊ニ御殿山ノ土中ヨリ石棺ヲ掘出シ又ハ五輪塔ノ出シ杯其餘  
諸器枯骨ノ有シ由聞シガ近頃小林子ノ示セル搦本アリ碑文ト覺シ  
紙上ニ記メ云天保九年四月二日ト是レ掘出セル月日カ碑文ハ正中南  
無阿弥陀佛右傍 永享十一年二日左傍 正音禪門正月然レハ墓銘  
カ年号ノ下二日法名ノ下正月ト有ルハ其年正月二日ナルベシ蓋シ正音  
禪門没ル月日ナラン又此年ヨリ至今テ四百年コノ禪門若クハ大中黒

新田ノ族カ抑又何人ナリシ乎

碑ノ圖 搦本



正信禪院  
密無河亦  
永子十年二日



林子書

先日殿山。髑髏堀出。中より出頭は石碑之。及  
乃い。必る。有。致。右。字。呈。言。説。々。

○五月ノ末能見物ニ往シ棧鋪ニテ或者語りシハ御殿山ノ土ヲ西丸ノ焦  
地ト入替ラレシガ何カ不淨ノ有テ引捨ニナリシヲ閣老松平泉州ト同  
役太田備中申受テ各下屋鋪ニ挽入タリト其事頗ル權欵コレ權門ノ權ニハ非ラス  
或ハ言フ御殿山ノ土ヲ鎌倉河岸ニ積置テ夫ヨリ御城内へ運バント  
爲シテ其後前ニ記セシ御神忌日四月十七日ノ災ニ同所ノ土小屋延焼シ  
タレバ傍々不祥ト爲ラレシ杯下説ニス。

鷺ニカ語りシハ頃ハ西丸御地堅初リ日々ニ洞突有リ予問フ何者



カコレヲ為ス曰西人ニテ一ハ糶町五番組名ハ三右衛門一ハ南傳馬町名ハ  
アバセイセイハ名也字鷺モ忘ルアバハ又問大城ノ洞突ハ何ナル者ゾ答ヤハリ  
緯号其人麻臉ナルユエ也

俗間第市等ノト同ジサレバ坊間及矣第ニ所云ノ者ト唱句ヲ殊ニス

唄一ヲハツル初春ト云ヒ一ハ祝儀一ハ七福神一ハ都廻トウケ其中初春ト云ハ狂

言ノ小唄ニ鑿ト呼フ者ト違フヲナシ又曰フ其唄ノ首ハツヲ初春ノ雪ト

唱フソレユエ木遣ノ名トセシ也因テ思フ予嘗テ白拍子ヲ作ルヤ

神君御入國ノ御船歌トテコレヲ今御船子ニ傳フ予採テ白舞ノ

歌トス其名ヲ鑿ヨロヒクドキト云フ文句全ク同シ然レバ是等ニ由テ今

用ユルカ予又聞ク昔御城御取建ノ年今ノ歌舞伎中村ノ祖猿若

材木運送ノ音頭ヲ勤タル御褒賞トメ金キン摩マヲ賜リテ今尚傳不

此度モ是ヲ例トメ西人ノ者何品ゾ賜ハラシテ請申タレバ允シ有テ  
木運キヤリ洞突音頭ノ料ニ銀地ノ扇ニ日丸ヲ出セシテ下サレテ殊ニ栄ト  
セシト

又糶町組ノ中ニ一少年年十七ナルガ有テ好顔絶色役人見テ婦女ナラ

ント疑フ就テ頭ニ冒シ手拭ヲ脱メルニ男子ニ疑ヒナシト又大御所公モ

御普請御慰ノ夕時トメ御透見アルニ折ヲリニハコノ美少年シモ御透

見有リト眞加ナル以年哉

或儒士語りシハ西丸御染揚五月十五六ノ頃有リシト予云御殿ハヤ

御建ナルカ否御殿ニハ非ズ大奥向ナリ予又云然ラバ宜ナリ成ホド後

宮ヲ始ニ爲ズバ還テ其順ヲ失フベシ

三石 樂府堂雜書

予林子ニ贈ル書

暑節々冷霖時作ぬ。又沙音後々坊々悲矣す。

林會ニ

淫霖土布々々不且憂唯秋稼々害を憐々

林子固ヨリ予ガ心根ハ知レリ。予モ亦林子ガ胸字ヲ知ラザルニ非ズ。相互ニ言異ル耳。俱ニ國家忠義ノ心ハ懷リ。

○夢物語ナガラ申スハ。カ子テ予ガモトニ来ル筈婦某ハ大城ノ大奥へ出入スルガ語リシニハ。外ニ某ノ語シラ交へ記ルス於美代ノ方ト称スル人ハ或致仕入道ノ養

子置シ人ナリシヲ。今ハ其女トメ官仕セシガ故アリテ。西上ニ幸ヲ得。今ハ全盛ノ身ト成シト聞ク。コノ局ノ結構頗ル美麗ヲ極メ中々尋常ノ造リ

予水邊ノイ  
三ノ大奥各局  
ヲモ見タルイ  
イツノ局モ墨置  
ハ五三三ノ次ノ間  
餘子斗舞卷子アル  
槍術ハ達トレト常  
奥勤ニテ

後明君時ヨリ仕時ニ後明君降アル様語出テハ落涙セシ人ナリ

トハ見エズ。板鋪タル舞臺ナドモ有リケルトカヤ。然ルヲ今茲ノ天災ニ燒盡セシ社恐入タリ。片ニ江東ニ隱栖者心憂テ斯クヲ録セリ。

○六月五日ノ沙汰書

西九御前書

朽木駿河書

新庄長門書

山中喜政書

吉松土佐書

小堀織部

大島甲斐書

津田美濃書

御持々

中奥沙汰

水野出雲守

松平鷲三

周部算次郎

太田善吉

井上左衛門

西丸中佐組

安藤八郎左衛門

在大將權中佐組

田島十左衛門

西丸中佐組

山中又三郎

土倉帶刀

大久保左衛門

中川忠五郎

山角市左衛門

西丸中佐組 納合仕家多由款公及意 御社寄

特... 上納合仕御社

右於更幕間老中伯耆守徳中守列在 和泉守中

御中丸西丸右大將權元年中侍在

西守ノ朽木八三千十五石 新庄八三千石 山中八三百俵 吉松七三百俵

御持ノ小堀五千石 中小五人 大島八四千七百石 津田八三千十石餘

水野二千五百石。松就鷲五千石。岡第三千俵。留番ノ太田八二千二百六十石。御先手井上九百石。本多ガ与頭安藤六百石。蜷川ガ与頭田邊四百俵。西城ノ歩頭山中二百俵。土屋三百俵。御船手ノ大久保三百五十石。二城ノ留守中川八百俵。二人扶持。山角八百石。石高合テ三萬八百三十五石餘。俵數四千六百俵。二人扶持。上金幾許カ。同日。

寄合

松平勘助

鍋島内匠

大岡兵庫

堀田彈正

同文言

右於菊ノ間老中列在。同人中御ノ若年寄中侍在。

伊藤左馬

明樂八五郎

中奥伊番

鳥居市十郎

長寄赤右衛門

伊十左衛門

田中唯一

新田清成左衛門

平家物語 卷之三

右中防書

佐野宇左衛門

侍書院番

宅間伊織

小笠原長吉

神保織部

大若總次郎

西丸侍書院番

村田茂助

徳川長盛

荻沼内通

吉本新五郎

川勝又三郎

寄合山城守

朝比奈六左衛門

寄合醫師

久志本左衛門

同文言

右中防古部左衛門頼朝伯耆守列在執事守中御。若年寄中  
西丸侍書

寄合松勘五千石。鍋島五千石。大岡三千石。堀田五千石。秋月三千石。本多  
七千石。佐藤三千二百石。合テ三萬千二百石。全數如前。

御膳奉明樂。武鑑祿ヲ載ズ。役料ハ二百俵。鳥居モ同之。役料二百俵。  
中番長寄千八百石。秋田カ組。田中六百石。朽木カ組。佐野カ祿未詳。  
ニセズ。小笠原カ組。宅間七百三十五石。神保千一百石。大前未詳。澁川カ組。

村越二千五百石。菅沼二千五百石。音木六百五十石。川勝七百石。菅山が  
組朝比奈五百石。醫久氏二千石。合テ一萬三千八十五石。俵數ハ四百  
禄審カナル者ニ氏因テ金數ヲ知ルヲ能ハス。

六月九日。

松平土佐守

西丸寺後府上納合は家方内納し後意即徳乞

い候所積運と思存候し内納と合三万五千兩

上納合と作付し右御寺後く沙用途も二と指加し

右於沙白書院縁頼老中列免和泉守ヤ御

○追記ス前ニ云シ大城胴突ノ謡歌四章後ニ其全詞ヲ聞ク

因テ左ニ録ス。

コノ唱句ノ上肩ニ「追カケ」又「棒車」ト記スル者ハ共ニ地突<sup>ゲツキ</sup>ノ井  
用器ヲ設ル目ヤスト知ルベシ。

追々

祝儀

君々をれも臣も中々水より船を浮むなり君上り  
いよ〜と仁深〜御臣やよををほうも因らぬる教へ  
まぢらぬみよけておこ物をも志中〜結保〜けも長〜ある  
民乃〜満ちも賑ひしてさてもあこひよ悦ひと重ぬる  
御代らむをたうるそや

初春

とてりまろよまをさそとてりまきかありや小梅とあり  
あふまの湯とてり卯の花紅地根の水よあつひは秋よ  
なれとその色に軍よあつ色のまみちよまよあつひ  
ういそい雪解の空をれてかゆゆの思も菊のまもこま  
まもあつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひ  
す此のちいやまよとてりあつひあつひあつひあつひあつひ

七福神

世の中よ下戸と上戸の物治る七福神のその中よ大思て  
とてり神をまよとてり下戸の神るれハ縁よよとてり一とてり

新くと神まよとてり世の中よまよとてり新のちちほ  
くよまよとてりまよとてり昆ゆつ天とてり神をえ  
より上戸の神をれい酒よまよとてり一とてり新とてり  
まよとてりまよとてり酒の二とてり二年酔あつひ  
目出とてり

椿年

都免くつ

わつひの因今まよとてり今ま初免て花の都とんうけ  
え一番よとてり掛り祇園清あか茂春日六条六角今懸  
さて豊玉の大明神三十三間堂大佛殿とてり福あつひ

山の麓をさうらふ長樂もよもを福ちさん一四塚桂乃里  
 とくは田う福と老の里むつらあや船是山愛宕くくぬよ  
 ほのとのめみぬ海神よほあとうー智ねよ志塚新の  
 山山嶺せんらん多うう寺宇治の橋かあさう芝橋う崎  
 めそさうしほく淀の川あかのえもそそ八幡の心社せこ  
 とのんよあれ多めよよのあがりるうれやのさうまを  
 うふうよのよ志を記ませうまらいと多うあやいさるうめ  
 扱天王さへありてい石の斎齋やる急りまい皇井の水の  
 ろうれもあるうこねるさやーさうま今いあう下りり記  
 右ノ文句古雅ナルハ全ク古傳ノユエナル當ニサレモ久シク處々ヲ歴タルト

覚シク誤脱以ナカラズト見ユ

○其中初春ノ文句

初春狂言ニハ鎧ト名ツケ  
御船唄ハ鎧クドキト云

狂言御船唄凡初春ノ雪ト

歌フ然ルニ此句ニ

ヨキ

初春ノ善ト云フ是ナリコレ

ヨキ

好日ト承ル言葉ナレバ

下皆コノ類  
多シ茲ニ畧ス

○又七福神ハ早シ何ニ由テ取ルヤ○終都廻リニ豊

國大明神ト有ルハ益ク御泰平ノ守護ナラシ乎諸人心モツカヌ社

芽出多ケレ

○六月十九日 泐汰書ノ移シ

松平三河守

西光火事ニ由在邑ニ流ル人教差知ル所達

伊徳也



松平大和守

名代松平大藏大浦

松平右近將監

名代松平上総介

同敷之節人教一差出与相違公室早通人教是也

新出格出端一申大徳方一紙骨折の故違 御徳小

付戻一申安否 上意小

松平左之衛督

名代松平共部大輔

同敷之節人教一差出与相違公室早通人教是也

右之者生格出端一申大徳方一紙骨折の故違

御徳小付戻一申安否 上意小

松平肥後守

松平隠岐守

名代保科弾正忠

同敷之節在邑一申人教一差出与相違公室早通人教是也

達 御徳小付戻一申安否 上意小

酒井左衛尉

小笠原文信大夫

同敷之節為何所檢廻 在出公室人教一差出

以辰達 伊徳小

松平因幡守

名代牧野忠江守

同敷之節人教差出以辰達 伊徳小

右於伊思書院滿掃劫以老中列位和泉守中御

松平至濃守

名代黒田甲斐守

同敷之節在國之少主人教差出者者先轉出

以辰達 伊徳小 付辰一守 伊守 上意小

松平出羽守

松平伊豫守

同敷之節在國之少主人教差出者先轉出

伊徳小

土屋相持守

名代土屋采女守

同敷之節人教差出者先轉出者先轉出

大膳方之節人教差出者先轉出 伊徳小 世辰一守

与上意小

松平吉宗亮

同敷之節大膳方之節 早建差出消活流方之節

骨抄抄録 内徳小付版 一ノノ字 上意小

松平丹波守

同文言

同部内徳正

永井飛騨守

西丸火事 一ノノ人教在 志格不精 出火 徳方 志骨

抄抄録 内徳小付版 一ノノ字 上意小

松平紀伊守

毛利山城守

松平長政守

同部 一ノノ人教 録入 小版 内徳小

土井能登守

黒田豊前守

木下大和守

同部 一ノノ人教 在 志格 出 志骨 志骨 内徳小

一ノノ字 上意小

板倉周防守

同部 一ノノ人教 在 志骨 内徳小

右抄抄録 内徳小付版 一ノノ字 上意小

井上河内守

名代牧野傳書

寺社本邦勸修中西九火事之節紅葉山

消防差高骨抄の教達 御社本邦一平史方

上意

牧野傳書

西九火事之節紅葉山の節出消防高骨抄の教

達 御社本邦一平史方 上意

喜山因幡書

同封之節早速紅葉山の節出消防高骨抄の教

之節抄之節高骨抄の教達 御社本邦一平史方

上意

名代是等之同封者同人中

町本邦

筒井紀伊書

時服四完

大草安房書

同封之節早速組之者高骨抄の教達

山本邦

土岐丹波書

同三

同封之節早速西九の節出消防高骨抄の教

之節抄之節高骨抄の教達 御社本邦一平史方

上意

小宮傳書

村瀬長門書

同前之節紅葉山 仰靈山 諸山内防人教録入

長引未波貴新の存す

目 野田宗正

同前之節早巻西丸の存す其の指高は一丈是

貴新の存す

六ノ月

酒井真之助

大之保房九郎

酒井八十之丞

坪内左兵衛

酒井未女

時辰三  
鐘約即切  
完

同前之節精出貴新の存す

時辰三 能勢帯刀

同前之節場取の存す

目三 長谷川信隆

同前之節沙汰の存す其の指高は一丈是

の存す

目三 三枝宗四郎

同部之節後出骨抄の序と下

時辰三

同

阿部 執貞

同部之節忌中ニハ西丸大ニ序ハテニ書後在出

録ニ若差外ハ公行ト下

四同付

大澤 之馬

池田 修理

水野 宗女

三枝 左多忠

一色 之冰

松平 之彦次

西丸序目付

同部之

同部之節場而ハ在歌防指節ハ城書抄ハ序と下

同

濱色 小膳

少後書

花房 長左忠

仁賀 保左忠

伊丹 三郎若忠

大崎 久左忠

長岡 六左忠

中川 世左忠

福崎 左忠

山口 内通

同部之

井戸大内藏

松平玄蕃

松平甲次郎

土佐兵庫

松中善孝

同封之市物在出骨物在付下

同三

西丸御門番

筒井平右衛門

同封之市物在出骨物在付下

同封之市物在出骨物在付下

古於同席掃部次老中伯耆守列在因人中御之是年寄中免也

侍在

大津場元巳

堀田之統

鍋島内通

同印元

大岡兵部

小笠原清九郎

堀田洋心

同封之市物在出骨物在付下

古於市古市物在出骨物在付下

西丸御門番

銀十枚

大河内善孝

同制之節組之者其指節亦通之并老市判鑑  
況又證書也證判證證書也亦不誤持是骨形也  
心懸厚底之條之條之

大市腰極所廣者

稻田八郎左衛門

同  
同制之節 市之通之條身亦斗方造り初層并  
市通分、形乃物通世中向之通之條身條是字派は  
格亦骨形也

右於同席仰者書列在就若書中條

西丸市腰物方

金計枚  
時辰二ツ

付 東在也  
小坂力五郎

同制之節形而向一處之天移也 仰膝所及之  
持出格亦骨形也

右於同席列在同人中條之元年書中 西丸市腰物

銀十枚 小市腰物方 吉田橋左衛門

同制之節紅書也 市腰物也

同 同 石倉小三郎

同制之節年並西丸市腰物也



同七枚

南卷標用定

永石六郎及集

同封... 節... 骨... 牙...

...

右控同席... 節... 骨... 牙... 西九...

同三枚

小...

長坂...

同封... 節... 骨... 牙...

同

同

宮澤...

同封... 節... 骨... 牙...

右控躑躅... 同... 骨... 牙... 西九...

西九...

同五枚元

同...

若田又三郎

大之傳...

近藤...

仰目見物格

...

阿久津...

近藤...

萩原...

西九...

右控同席... 骨... 牙... 西九...

大...

井野口孝十郎

石島富之助

志山六之助

松本誠之助

市ノ勇之丞

土方清三郎

原田芳三郎

矢島為之丞

前田信次郎

同封元

同垂

同封元

四佐目付

上村九左衛門

生島春藏

尾島三十郎

福岡半十郎

茂呂八左衛門

杉崎勉之丞

市島宗左衛門

神谷昇大史

小野信之助

原田寛藏

笠原新左衛門

石川九十郎

小森宇源次

満田作内

加藤彌藏

三浦作次郎

稲垣為一郎

鈴木某助

三橋實之丞

井持紀三郎

江本分左衛門

北條雄左郎

田中甚左衛門

新方源三郎

左田嘉十郎

堀越十五郎

浅沼三郎

今川要作

峯本誠一郎

石川常之丞

田新元

田中玄三郎

山田玄三郎

石田玄三郎

市谷玄三郎

加藤玄三郎

堀田玄三郎

思田玄三郎

子種玄三郎

加藤玄三郎

小野玄三郎

西九内同付

佐藤玄三郎

素佐玄三郎

茶田玄三郎

高橋玄三郎

久保玄三郎

坂田玄三郎

增田玄三郎

橋本玄三郎

滝玄三郎

紫田玄三郎

津田若彦

中多権彦房

松本礼助

澄美又彦房

木村隆之進

山崎又彦房

坂田五郎助

山田勝右衛門

三浦勝三郎

小嶋平藏

四攝降者次

尔人氏

大御殿様御侍

目見可

中御殿御用物書

同五枚

同五枚

同三枚

同封<sub>一</sub>前<sub>二</sub>信<sub>三</sub>標<sub>四</sub>方<sub>五</sub>花<sub>六</sub>少<sub>七</sub>色<sub>八</sub>之<sub>九</sub>五<sub>十</sub>斤<sub>一</sub>付<sub>二</sub>中<sub>三</sub>之<sub>四</sub>身<sub>五</sub>形<sub>六</sub>

外付<sub>一</sub>上<sub>二</sub>下<sub>三</sub>

右於燒大<sub>一</sub>万<sub>二</sub>永<sub>三</sub>井<sub>四</sub>肥<sub>五</sub>若<sub>六</sub>与<sub>七</sub>出<sub>八</sub>元<sub>九</sub>同<sub>十</sub>人<sub>一</sub>中<sub>二</sub>海<sub>三</sub>

同五枚

善徳方改紋

五十嵐常之丞

同封<sub>一</sub>前<sub>二</sub>早<sub>三</sub>進<sub>四</sub>西<sub>五</sub>凡<sub>六</sub>之<sub>七</sub>若<sub>八</sub>出<sub>九</sub>骨<sub>十</sub>形<sub>一</sub>外<sub>二</sub>付<sub>三</sub>上<sub>四</sub>下<sub>五</sub>

同

目

尾花桂次郎

同五枚

善徳方立標梁

柏木因幡

同封<sub>一</sub>前<sub>二</sub>紅<sub>三</sub>葉<sub>四</sub>山<sub>五</sub>佛<sub>六</sub>靈<sub>七</sub>骨<sub>八</sub>之<sub>九</sub>古<sub>十</sub>信<sub>一</sub>標<sub>二</sub>是<sub>三</sub>骨<sub>四</sub>形<sub>五</sub>

外付<sub>一</sub>上<sub>二</sub>下<sub>三</sub>

右於同席同<sub>一</sub>人<sub>二</sub>中<sub>三</sub>海<sub>四</sub>

御縁類家

新村登八郎

川副勝三郎

同部ノ事西九御縁類方御リノ者有 御縁類方

々々不御持出方御リノ中後方御縁類方ノ事一展

ノ事ニハ

右ノ御縁類家ノ御縁類老中列有 和泉守中後ノ事年芳中侍有

津山川越濱田明石ノ四侯ハモトヨリ連枝ノ侯今ハ尚ホ御骨肉會津松山西侯モ其始御骨肉ノ流レ酒井小笠原ニ侯ハ譜代并旧恩顧ノ家々鳥取侯モ昔ヨリ今又御親近ノ家福岡ハ御當家追々

御縁類ノ家羽州ハモトヨリ御連枝ノ末豫州ハ輝政以來御恩顧ノ末土屋ハ譜代モ云ベク高崎ハ信綱ノ末丹州モ古キ御縁類岡部ハ神祖以來御隨身ノ家高槻モ近世ナガラ御譜代松紀壹二氏モ御昔親ノ家土井黒田ハ新古ノ御譜代板井牧青ハ素ヨリ譜代殊ニ役柄ナリ町奉行以下數人ハ威ク旗下ノ輩固ヨリ論ナシコノ中毛利山州木下和州等ハ分家小家トハ云ナガラ一ハ五大老ノ末又關白ノ流ナル者斯ク御奉公ニ身ヲ容レ旗下御使番ノ福島ハ定メシ正則ノ末ナルベシ是亦關原以來御隨身ノ家ナレモ此時ニ至テ皆信實ヲ顯スレ備ニ光神御深仁ノ榮見スルナル感仰ニ奉ルニ尚ホ足ラス右ハ賞ナルガ罰ハ其明日ニスガ聞ヘケル

中夜覚

山本赤五郎

名代山中十郎

當三月九日加泊く受病言身不存此同候事

助勤候不申致事上増くあり候事重くも二江

作付候事格あし心定先之候事普請入道奉先

作付

井戸綿七郎

西丸火事候節大急候様加泊く者不存出二人

泊在事候事九中記録亦一品も持込不申候

失心候様候不調候事あり候事急候事一火

作付候事格あし心定先之候事格あし 作付

志賀友四郎

森傳吉郎

友井金之助

西丸火事候節加泊書西丸表山右半井戸綿七郎候

事記録亦一品も持込不申候事格あし心定先之候事

為候事申言不存候事候事相違且又申言加泊

山中赤五郎候病事と申言候事候事候事候事候事

不存候事候事候事候事候事候事候事候事候事

一 昨未半竟一回の始方未熟くす、此極く此極く  
一 一 昨未半の始方未熟くす、此極く此極く

林田忠藏

名代林田金次郎

西丸大子之節、移向一處大移り大急し、極く此極く  
此極く此極く、此極く此極く、此極く此極く、  
持出、此極く此極く、此極く此極く、此極く此極く、  
一 一 昨未半の始方未熟くす、此極く此極く

中野健次郎

名代八木名三郎

長井重次郎

同窪田金次郎

筒井清藏

同吉田伊左衛門

西丸大子之節、移向一處大移り大急し、極く此極く  
一 一 昨未半の始方未熟くす、此極く此極く、  
此極く此極く、此極く此極く、此極く此極く、  
一 一 昨未半の始方未熟くす、此極く此極く

西丸大子之節

西丸大子之節

永谷常太郎





右山本井戸西人ハ西丸表御右筆志賀森藤井三人ハ御本丸表  
御右筆組頭林田ハ西丸御納戸組頭中野以下三人ハ同御納戸  
田村神谷モ同御納戸頭朽木駿州ハ同ク御留守ナリ莫止ト云々  
シ  
六月廿一日 汰汰書

稻葉丹後守

西丸御普信并御左傳上御付ハ此世家寺社在リ

此御右方右御用御先ハ成ル等々金三丁兩上納

付有等類ト通上御付

右於芙蓉之旨。左中列在。和泉書中後々。

松前隆之助

名代加藤大藏左補

同新御普信并上納令江守与内納之御在

御禮也。御上思在。御内納之御金并兩

上納也。御付右御普信ハ御用通上ト云々如ク

右於波之旨。列在。同和泉書中。

大坂町在リ

御部山城守

堀 伊賀守

中奥御普信

大坂御普信

正右衛門 共成 共成書

少俊番

服部 伴

川勝 舎人

少書院番

本多 兵庫

少俊改

朝比奈 次左衛門

少書院定吟味改

川路 三左衛門

西丸少書院番上納金江分与出納所取立 伊藤 奇

特々子与出納所取立上納金与作所

右於其卷ノ列我同番同人中御ノ总年号申侍我

并合

蒔田 権佐

長谷川 利十郎

安藤 裕次郎

少書院番

森川 下総守宛

助次郎父 隠居

石川 之木

同文言

右於菊ノ列我同番同人中御ノ侍我同番

大少番

船政務所守宛

石川 次郎左郎

遠山 内記

少少性組

久貝因幡守 松浦大膳

久世三之丞

秋田清路守 仙石量太郎

服部久左衛門

真津左京

長田理助

松田純四郎

松平又十郎

西丸伊佐守

市橋大膳

左田七内

小出権之助

岡部庄左衛門

川田六三郎

伊書院齋

永井兵次郎

諏訪庄助

坂部三十郎

左田外記

京極兵部

西丸山言院書

山岡十之助

村越茂助

田沼玄水

土方十三郎

後藤督太郎

富永孫次

三枝貞五郎

奥山謙三郎

諏訪部謙吉

荻谷山城守

伊馬

大沙番

船越

右將

伊代

伊州人

宮内

同文言

右左衛門部登縁頼伯若中備中守列左。致若中守。伊州人。沙丸西丸右大將様。元年。伊州中侍丸。

稻丹八。山州淀城主十萬二千石。松隆八。松前蝦夷ヲ領ス。今一萬石二。

准々大阪ノ跡部。三千百三十七石余。堀。二千五百石。中小ノ小笠原。五  
千石。浪ノ御船手本氏。三千二百石。御使番。服氏。二千五十石。川氏。三千五  
百七十三石余。御書院。高井カ與頭。本多。九百石。御使頭。朝比奈。五百  
石。勘吟川路。九十俵。三人扶持。寄合。時田。七千七百十六石。長谷川  
三千百十五石余。安藤。三千石。戸川。隱居。子助次郎。八千五百石。大御  
番。ノ與頭。石川。三百石。遠山。二百三十石。御小性。久貝カ組。松浦。千五百石。  
久世。祿ヲ知ラス。此下。秋田カ組。六人。西丸。本多加組。五人。御書院。大久保。  
曾我。小笠原カ組。五人。西丸。同。小笠原。滝川。高力。菅谷カ組。八人。皆  
祿ヲ審ニセス。御馬預。諏氏。三百俵。大御番。ノ金田。不詳。右將様。御  
馬預。村松。二百俵。御代官。添田。百五十俵。御附人。徒頭。ノ織田。二百俵。

合テ什伍萬貳陌貳什壹石參餘。玖陌肆什俵參人扶持。上金ノ  
數ノ如キハ。大名ノ兩氏ハ知ルベケド。餘ハ予カ同姓。松浦。大膳。二間。三流  
石。凡下其數ヲ審ニシタレバ。茲ニ詳祿ス。大阪ノ跡山。百兩。堀。七百兩。中  
小小笠。百五十兩。大船ノ本多。百兩。御使番。服。八百兩。川。八七十兩。書。与  
頭。本多。百兩。御使頭。朝氏。四十兩。勘吟川路。二十兩。寄合。時。八百五  
十兩。長。八百兩。安。八百二十兩。戸川。隱居。二十兩。大番。与頭。石。八十兩。遠  
二十兩。御小性。久貝ノ松浦。五十兩。久世。二十兩。秋田ノ仙石。八十兩。服部。四十  
五兩。與津。四十兩。長田。三十兩。松田。三十兩。松平。又。二十五兩。西ノ小。本多カ  
市橋。七十兩。戸田。八十兩。小出。五十兩。岡部。四十兩。川田。三十兩。書ノ大久カ  
永井。百兩。諏訪。二十兩。曾我ノ坂部。二十兩。小笠ノ戸田。八十兩。京極。六

十兩。西ノ書小氏カ山岡六十兩。滝川ノ村越八十兩。高力ノ田沼百兩。土  
方五十兩。後藤五十兩。富永五十兩。菅谷ノ三枝五十兩。奥山二十兩。御馬  
預諏氏不審。大番ノ金田二十五兩。右將様ノ御馬預。村松二十兩。御代  
官添田二十兩。宮内殿ノ織田二十兩。金高合テ壹萬捌百伍拾  
六月廿六日。

時服三

伊目付

水野 未女

西九火ノ節場也。右誠消防。是馬ノ城骨也。

小舟ノ下

同二

伊使番

土倉 兵部

同敷ノ節場也。右誠骨也。小舟ノ下

右ノ於部。老中列在。和泉守中。是年。中侍丸。

但右兩人。去十九日。所用。右ノ交。揚合。府令。日。中。成。

七月二日。

堀本行

曲淵 甲斐守

中妻 涉程

喜山 内記

西九。涉。普。信。府。上。納。金。は。年。右。給。後。是。御。禮。奇。

特。多。事。也。其。後。右。給。色。上。納。金。日。御。禮。奇。

右ノ於部。老中列在。中。務。大。補。中。侍。是。年。中。侍。丸。

寄合

宮城 大膳

船橋動在也

同文言

右於菊之間列在<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>若

侍附人

異教用<sub>レ</sub>格<sub>レ</sub>長柄<sub>レ</sub>朝比宗忠<sub>レ</sub>巳<sub>レ</sub>郎

同文言

右於<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>部<sub>レ</sub>登<sub>レ</sub>級<sub>レ</sub>頼<sub>レ</sub>誠<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>

侍收廻

石川大陽<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>保<sub>レ</sub>純太郎

御書院番

大<sub>レ</sub>保<sub>レ</sub>紀<sub>レ</sub>伊<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>也

長谷川<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>郎

侍代官

多羅尾<sub>レ</sub>藏<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>也

御<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>也

武嶋官<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>也

右於<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>席<sub>レ</sub>列<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub>在

右曲淵以下九人<sub>レ</sub>禄<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>五人<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>テ<sub>レ</sub>壹<sub>レ</sub>萬<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>阡<sub>レ</sub>貳<sub>レ</sub>陌<sub>レ</sub>石<sub>レ</sub>俵<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>百

又一人其餘四人<sub>レ</sub>禄<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>ラ<sub>レ</sub>ズ

曲淵二千石 青山五千五百石 宮城  
四千石 船橋百俵 多羅尾千七百石

○或人<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>ル<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>夢<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>七<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>フ<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>テ<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>退<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>項<sub>レ</sub>ト<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>檜<sub>レ</sub>間

ノ<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>丸<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>臺<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>ト<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>井<sub>レ</sub>タル<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>炭<sub>レ</sub>俵<sub>レ</sub>ト<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>ヨ<sub>レ</sub>リ<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>圖<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>突

テ<sub>レ</sub>焚<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>リ<sub>レ</sub>タル<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>男<sub>レ</sub>凡<sub>レ</sub>消<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>バ<sub>レ</sub>ズ<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>ウ<sub>レ</sub>チ<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>ヤ<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>欄<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>ト<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>焚

ツキタル<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>フ<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>丸<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>普<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>鳥<sub>レ</sub>凡<sub>レ</sub>井<sub>レ</sub>タル<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>呼<sub>レ</sub>寄<sub>レ</sub>テ<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>ク<sub>レ</sub>鎮<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>シ



夕御屋脊ニ焼出ズト何カ九年ニテ太上天ノ火災ノ有ルヤト  
聞テ我モ亦夢覺タリ。

七月廿日。

京都御所

小堀主統

大津御所

石原清左衛門

西九郎普賢守上納言左近衛左衛門尉兼  
御禮寄

特ニ多ク思ハル儀ニ就テ是上納言ニ  
仰付

右左衛門尉兼縁類掃部左衛門中納言  
中務大輔中納言

西九郎書院番

間部内藏助

小三原志保守

西九郎普賢守  
大同源左衛門

淀川色書船之記  
南倉為次郎

二條西倉在行格

京都西大工  
中井忠次郎

同文言

右左衛門尉大炊頭左近衛左衛門尉  
西九郎普賢守中納言

小普賢守

左衛門尉兼  
間部慈五郎

过 久五郎

都筑海之助

大津左邊

同文言

左於躑躅之間同人中海

所載十人。祿所知者五人。不審者五人。祿所知千百石。六百俵。四十人。

扶持。総々上金ノ數ヲ知ラス。小堀六百石。石原三百俵。大岡百俵。前倉二百俵。中井五百俵。四十人扶持。

